雨はよく季節を教へる。だから季節のかはり目ごろの雨が心にとまる。梅のころ、若葉のころ、または冬のはじめの時雨など。

梅の花のつぼみの綻びそむるころ、消え殘りの雪のうへに降る強降のあたゝかい雨がある。櫻の花の散りすぎたころの草木の上に、庭石のうへに、またはわが家の屋根、うち渡す屋並の屋根に、列を亂さず降り入つてゐる雨の明るさはまことに好ましいものである。しやあ〳〵と降るもよく、ひつそりと草木の葉末に露を宿して降るもよい。

わが庭の竹のはやしの淺けれど降る雨見れば
春は來にけり
しみじみとけふ降る雨はきさらぎの春のはじ
めの雨にあらずや
窓さきの暗くなりたるきさらぎの強降雨を見
てなまけをり
門出づと傘ひらきつつ大雨の音しけきなかに
梅の花見つ

ぬかるみの道に立ち出で大雨に傘かたむけて
梅の花見つ
わがこころ澄みてすがすがし三月のこの大雨
のなかを歩みつつ
しみじみと聞けば聞ゆるこほろぎは時雨るる
庭に鳴きてをるなり
こほろぎの今朝鳴く聞けば時雨降る庭の落葉
の色ぞおもはる
家の窓ただひとところあけおきてけふの時雨
にもの讀み始む
障子さし電燈ともしこの朝を部屋にこもれば
よき時雨かな

など、春の初めの雨と時雨とを歌つたものは私に多くあるが、大好きの若葉の雨をばどうしたものかあまり詠んでゐない。僅かに、

うす日さす梅雨の晴間に鳴く蟲の澄みぬる聲

　は庭に起れり

雨雲のひくくわたりて庭さきの草むら青み夏
　むしの鳴く

などを覺えてゐるのみである。

夕立をば二三首歌つてゐる。

飯かしぐゆふべの煙庭に這ひてあきらけき夏
　の雨は降るなり

はちはちと降りはじけつつ荒庭の穂草がうへ
　に雨は降るなり

俄雨降りしくところ庭草の高きみじかき伏し
　みだれたり

澁柿のくろみしげれるひともとに瀧なして降
　る夕立の雨

一日のうちでは朝がいゝ。朝の雨が一番心に浸む。眞直ぐに降つてゐる一すぢごとの明るさのくつきりと眼にうつるは朝の雨である。

眺むるもよいが、聽き入る雨の音もわるくない。ことに夜なかにフツと眼のさめた時、端なくこのひゞきを聽くのはありがたい。

わが屋根に俄かに降れる夜の雨の音のたぬし
　も寢ざめて聽けば

あららかにわがたましひを打つごときこの夜
　の雨を聽けばなほ降る

雨はよく疲れた者を慰むる。

あかつきの明けやらぬ闇に降りいでし雨を見
　てをり夜爲事を終へ

遠山の雲、襞から襞にかけておりてゐる白雲を、降りこめられた旅籠屋の窓から眺める氣持も雨のひとつの風情である。

山が若杉の山などであつたらば更にも雨は生きて來る。

紀伊熊野浦にて。

船にして今は夜明けつ小雨降りけぶらふ崎の

御熊野の見ゆ

下總犬吠岬にて。

とほく來てこよひ宿れる海岸のぬくとき夜半
を雨降りそそぐ

信濃駒ヶ嶽の麓にて。

なだれたち雪とけそめし荒山に雲のいそぎて
雨降りそそぐ

上野榛名山上榛名湖にて。

山のうへの榛名の湖（うみ）の水ぎはに女ものあらふ
雨に濡れつつ

常陸霞が浦にて。

苫蔭にひそみつつ見る雨の日の浪逆（なさか）の浦はか
き煙らへり

雨けぶる浦をはるけみひとつゆくこれの小舟
に寄る浪聞ゆ

平常爲事をしなれてゐる室内の大きなデスクが時々いやになつて、別に小さな卓を作り、それを廊下に持ち出して物を書く癖を私は持つて居る。火鉢の要らなくなつた昨日今日の季候のころ、わけてもこれが好ましい。

廊下に窓があり、窓には近く迫つて四五本の木立が茂つてゐる。なかの楓の花はいつの間にか實になつた。もう二三日もすればこの鳥の翼に似た小さな實にうすい紅ゐがさして來るのであらうが、今日あたりまだ眞白のまゝでゐる。その實に葉に枝や幹に、雨がしとしと降つてゐる。昨日から降つてゐるのだが、なか／＼止みさうにない。

楓の根がたの青苔のうへをば小さい辨慶蟹の子が二疋で、さつきから久しいこと遊んでゐる。

ゆきあひてけはひをかしく立ち向ひやがて別
れてゆく子蟹かな

温泉宿の庭

旅と云つても、ほんの一夜泊の話なのですが——。

私のいま住んでゐます沼津から程近く、六七ヶ所の温泉があります。なかの吉奈(よしな)温泉から、病氣でいま此處に來てゐる、おひまならお遊びにおいで下さいませんかといふ思ひがけない手紙がF——さんから來ました。F——さんは我々の歌の社中の人で、そして踊りの師匠として世に聞えた婦人なのです。夙うから病氣入院中の事をば知つてゐたが、もう湯治に出かけられる様になられたかと喜びながら私は早速家を出て、夕方早くその宿に着きました。田舍に似合はぬ大きな宿ですが、その最も奧まつた一室がF——さんの部屋でした。きちんと片附いたなかに思つたよりもなほ元氣よく美しく坐つておゐでゝした。緣側からすぐ小さな池となり、池の向うが築山、築山の向うはもう天然の山で峻しい坂に欝蒼と樹木が茂り、その茂みの中には他處から引かれたのでせう、きれいな岩を傳うて愛らしい瀧となつて流れ落ちてゐました。

少し位ゐなら歩き度いとの事で食事後、打ち連れて近所を散歩しました。宿から一二町も歩くとすぐ眞青な稻田で、稻田の向うに溪が流れてゐました。もう八月に入つてゐましたに何といふ螢の多さだつたでせう、稻田のうへ一面、それこそ歩いてゐる我等の顏にも來てあたりさうに、點りつ消えつ靜かに〳〵まひ遊んでゐるのです。それでゐて私にはたゞ美しいとか見ごとだとかいふより何やらしみじみした寂しいものに眺められたのでした。矢張りもう秋の螢といふ樣な感じが何處かに動いてゐたに相違ありません。螢の話、歌の話など、一つ二つ語り合つてほど〳〵に宿に歸り、やがて私は私の部屋に引き上げました。部屋は築山や池を中に斜めにF——さんの所と向き合つてゐました。そとから入れば流石に部屋は暑苦しく、一度入つた蚊帳から出て、緣側に腰をかけてゐると、山から降りてくるひやゝかな風、瀧のひゞき……

みじか夜をひびき冴えゆく築庭(つきやま)の奧なる瀧に
聽き恍(ほ)けてゐる
燈火のとどかぬ庭の瀧のおとを獨り聽きつつ
戸を閉しかねつ

翌日は半日あまりF——さんの部屋で遊びました。そして、眼前の景物を題に一首二首と詠むこと

になりました。F——さんにも面白いのが出來たのでしたが、惜しい事にはいま思ひ出せません。

水口につどへる群のくろぐろと泳ぎて鮒も水
もひかれり
いしたたきあきつ蛙子あそび恍け池にうつれ
る庭石の影
まひおりて石菖のなかにものあさる鶺鴒の咽
喉の黄いろき見たり
庭石のひとつひとつに蜥蜴ゐて這ひあそぶ晝
となりにけるかな

秋風の音

いちはやく秋風の音をやどすぞと長き葉めで
て蜀黍は植う

私は蜀黍の葉が好きである。その實を取るのが望みならば餘り肥料をやらぬ方がよい。然し、見ごとな葉を見やうとならばなるたけ多く施した方がよい。

書齋の窓に沿うた小さな畑に私は毎年この蜀黍を植ゑる。今年はその合間々々に向日葵を植ゑて見た。兩方とも丈の高くなる植物で、一方はその葉が長く、一方はその花が大きい。

一年中さうではあるが、夏は別して私は朝が早い。大抵午前の三四時には窓をあけて椅子に倚る。此頃だともう三時半には戸外がうす明るくなつて來る。そのさやかな東明の微光のなかに、伸びるだけ伸びつくしたこの二つの植物が、一つは黒ずんで見えるまでの青い葉を長々と垂れて立ち、一つは今朝にも咲き出でた樣に鮮かな純黄色の大輪の花を大空に向けて咲いてゐるのを見ると、まつたく眼のさめる思ひがするのである。窓からさした電燈の光で見ると、蜀黍の葉の兩側には點々として露の

玉が宿つて居り、なほよく見るとその葉のまんなかどころにちよこなんと一疋の青蛙が坐つてゐる。不思議にこの葉にはこのお客樣が來てゐるものである。

ぢいつとそれらに見入つてゐると、その畑の中から蟋蟀の鳴く音が聞ゆる。もうこの蟲が鳴き出したかと思つてゐると、遠くでは馬追蟲の澄んだ聲も聞えて來るのである。

夏の末、秋のはじめの斯うしたころもちはいかにも忙しいものである。

愛鷹(あしたか)山の根に湧く雲をあした見つゆふべ見つ
夏のをはりとおもふ

明がたの山の根に湧く眞白雲わびしきかなや
とびとびに湧く

畑なかの小みちを行くとゆくりなく見つつか
なしき天の川かも

沼津の町から私の住んでゐる香貫山の麓まで田圃の路を十町ほど歩いて來ることになる。をり／＼町に出て酒を飲む。客と共にすることもあり、獨りの時もある。そしてそれは多くは夜で、その歸りは大抵夜なかの一時となり二時となる。

たゞ獨りして田圃中の路を歸つて來る氣持を私は好む。

歸つて來る路の片側には小さな井手が流れてゐる。ほんのちよろ／＼とした小ながれにすぎぬが、水は淸らかで、水邊には珠數草と螢草とが青々と茂つてゐる。

醉つた身體の重い足取で、その井手のそばに通りかゝると、珠數草の根を洗ひながら流れてゐる水のせゝらぎが耳につく。一度、小用をするか何かでそれに耳をとめて以來、いつか癖となつて通りかかるごとに氣を附ける樣になつたのかも知れぬ。晝間や、用事を持つた時には殆んど忘れてゐる小流が、さうした場合にのみ必ずの樣に耳について來る。

下駄をぬいで揃へてそれに腰をおろす。足は自づと螢草の茂みにだらりと垂れることになるのである。さうして何を見るともなく、聽くともなく、幾らかの時を過す。時としては、一時間前後もさうしてぼんやりしてゐることがある。水の音の靜かなのが身に沁みるのではあらうが、さればとてわざ／＼それを聽かうとするでもない。たゞさうして醉つた身體を休めて風に吹かれるのが嬉しいのらしい。夜なかの一時二時となるともう人も通らない。廣い田圃のたゞ中に煙草を吸ふのも忘れてさうした時間を送ることは酒の後でなくては出來ず、また夜なかでなくては出來ぬ話である。

野末なる三島の町の揚花火月夜の空に散りて
消ゆなり

うるほふとおもへる衣の裾かけてほこりはあがる月夜の路に

天の川さやけく澄みぬ小夜更けてさし昇る月の影は見えつつ

路ばたの木槿は馬に喰はれけり　（芭蕉）

この句は私の大好きな句である。延いて木槿の花も好きなものゝ一つとなつた。

秋の來たのを知らせる花で先づ咲き出すのはこの木槿であらう。夏のうちから咲くのであるが、彼の『土用なかばに秋風ぞ吹く』のこゝろもちで、どんな暑い盛りに咲いてゐてもこの花には秋のこころが動いてゐる。紫深い、美しくてさびしい花である。

走り穗の見ゆる山田の畔ごとに若木の木槿咲きならびたり

畑の隈風よけ垣の木槿の花むらさき深く咲き出でにけり

若葉の頃と旅

櫻の花がかすかなひかりを含んで散りそめる。風が輝く。その頃から私のこゝろは何となくおちつきを失つてゆく。毎年の癖で、その頃になると必ずの樣に旅に出たくなるのだ。また、大抵の年は何處かへ出かけてゐる。

櫻の花の散りゆくころ、やはらかく萌えわたる若葉の頃、その頃の旅の好みを私は海よりもおほく山に向つて持つ。山と云つても、青やかな山と山との大きな傾斜が落ち合ふ樣な、深い溪間が戀しくなる。

上州の吾妻川は澁川町で沼田の方から來た利根川と落ち合つてゐるが、その澁川町から十里ほど溯つたあたりに普通に關東耶馬溪と呼びなされてゐる溪谷がある。兩岸は切り立つた樣な斷崖で、その斷崖には意外なほど多くの樹木が生えてゐる。その相迫つた斷崖の底に極めて細く深く青み湛へた淵は、時にまた雪白な飛沫をあげた奔湍となつて流れ下る。

溪流そのものも矢張り他に見られぬ面白さを持つては居るが、私はことにその流を挾む兩岸の斷崖に茂つて居る木立を愛するものである。樹は多く年を經た老樹で、土氣とぼしい岩から岩の間に、殆んど鑛物化した樣なその根を張り枝を伸ばして、形あやしく立つて居る。私が初め其處を見たのは秋の末、落葉の頃であつた。いはゆる寒巖枯木の風情は充分に眺められたが、それを見るにつけても若葉の頃がなほ一層にしのばれた。で、その翌年の五月、はる〴〵とまた其處へ出かけて、山櫻が咲き、山櫻が散り、とりどりの木の芽が萌え、躑躅が咲き、藤の花の咲き出すまで、二十日ほども其處に程近い川原湯溫泉に泊つてゐて、每日々々その溪間の眺めを樂しんだものであつた。川原湯溫泉から直ぐその不思議な眺めを持つ峽谷に入つて出はづれるまで約一里、出はづれると遙かに大きな吾妻川の流域が見渡された。原野とも云ひたいこの廣大な溪谷にもく〳〵とした若葉の呼吸が萠え立つてゐるのであつた。

朝づく日峯をはなれつわが歩む溪間のわか葉
青みかがやく

朝づく日さしこもりたる溪の瀨のうづまく見
つつ心しづけき

溪合にさしこもりつつ朝の日のけぶらふとこ

ろ藤の花咲けり

荒き瀨のうへに垂りつつ風になびく山藤の花
の房長からず

溪間と云へばおほく其處に多い溫泉を見逃がすわけにはゆかぬ。谷にそつた川原湯溫泉は吾妻川に臨んだ斷崖の上に在つて、非常に靜かな、景色もいゝ所である。其處から、少し下つて中之條町より左折した一支流の谷間には四萬溫泉がある。また、澁川から利根川の方へ溯ればその本流に沿うて十幾個所かの溫泉が出てゐるのだ。私の其處を廻り歩いたは秋であつたが、若葉の頃、ことに細かな雨のそゝぐ曙など、人知らぬそれら谷間の湯にひつそり浸つてゐるのは決して惡くあるまいと思ふ。

東京近くの溪では秩父であらう。信越線熊谷驛から入つて三峰山に登る間の溪流、それから東京山手線の池袋驛から武藏野を横切つて飯能に到り、其處から沿うて上つてゆく名栗川の溪流、共に秩父の山から出て、前のはやゝ大きく、後者は極めて小さい流ではあるが、小さいなりにいかにも淸らかなすが〳〵しい溪である。名栗川の上流には名栗鑛泉がある。杉木立の青々した中に、ちよろ〳〵と流れる水を控へて二軒の湯宿があつた。

朝ばれのいつかくもりて眞白雲峰に垂りつつ
蛙鳴くなり

下ばらひ清らになせし杉山の深きをゆけばう
ぐひすの啼く

つぎつぎに繼ぎて落ちたぎち杉山のながき峽(はざ)
間(ま)を落つる溪見ゆ

しらじらとながれてとほき杉山の峽(かひ)の淺瀨に
河鹿なくなり

湖もい丶。山の奧の靜かな湖、新樹がひそかに影をひたして、羽虫の群がひく丶水の上にまひ、小魚がをり〳〵跳ね、郭公が岸の木立の中で啼く。さうした景情を私は榛名山の上の湖で心ゆくまで味つた事がある。

その湖には伊香保溫泉を經て登つてゆくのだ。伊香保の若葉のよさは多くの人が知つて居ること丶おもふ。溫泉町附近の木立の深いのもよく、其處から見渡した前面の廣々しい雜木原の新綠は全く心を躍らせた。人はよく伊香保の紅葉といふが、紅葉は何と云つても感じが乾いてゐる。枯れてゐる。

其處から湖までたしか二里か二里半の登りであつたと思ふ。その間、多くは松や落葉松の植林地を行くのであるが、その林の中に郭公がよく啼いた。松林を通り越すと、一里四方もありさうな廣い草原が見出された。其處の山窪の上の空には夏雲雀が無數に啼いてゐた。その草原を通り過ぎると湖の

輝きが岸の木立がくれに見えて來るのだ。

湖岸に在る宿屋も氣持のい丶ものであつた。宿の前の湖でとれた魚や蜆をいろいろに料理してたべさせてくれたのも嬉しかつた。私の行つた日の夕方からはら〳〵と雨が落ちて來て、翌朝はまたこの上ない晴であつた。

みづうみのかなたの原に啼きすます郭公の聲
ゆふぐれ聞ゆ

湖(うみ)ぎはにゆふべ靄たち靄のかげに魚の飛びつ
つ郭公きこゆ

吹きあぐる溪間の風の底に居りて啼く郭公の
煙らひきこゆ

となりあふ二つの溪に啼きかはしうらさびし
かも郭公聞ゆ

それは山上の湖、これは例の『あやめ咲くとはしほらしや』の唄で潮來(いたこ)あたりの水の上を船で廻つたも同じく初夏の頃であつた。香取の宮から河とも湖ともつかぬ所を漕いで鹿島の宮へ渡り、更に浪(な)逆(さか)の浦を潮來へ横切る時には小雨が降つてゐた。『潮來出島の眞菰のなかで』といふ眞菰や蒲の青々し

た蔭にはあやめはやゝ時過ぎてゐたが、薊の花の濃紫が雨に濡れて咲き亂れてゐた。舟はあやめ踊を以て聞えて居る潮來の廓の或る引手茶屋の庭さきの石垣下に止つた。そして船頭の呼ぶ聲につれて茶屋の小女は傘を持つていそ〳〵舟まで迎ひに來たのであつた。

明日漕ぐと樂しみて見る沼の面の闇のふかみに行々子(よしきり)の啼く

わが宿の灯かげさしたる沼尻の葭のしげみに風さわぐなり

苫蔭にひそみつつ見る雨の日の浪逆(なさか)の浦はかきけぶらへり

雨けぶる浦をはるけみひとつ行くこれの小舟に寄る浪聞ゆ

さきに私は若葉の頃になれば旅をおもふといふことを書いた。さういふ言葉の裏にはその季節に啼く鳥の聲、山ふかく棲むいろいろな鳥の啼聲をおもふ心がかなり多分に含まれてゐるのを自分では感じてゐる。

先づ郭公である。次いで杜鵑である。筒鳥である。呼子鳥である。その他山鳩の啼く音、駒鳥の啼く音、それからそれと思ひ出されて來て、斯う書いてゐながらも何處やらにそれらの鳥のそれ〴〵の寂しい聲の聞えてゐるのを感ずるのだ。まつたく若葉のころの山にはいろ〳〵な鳥が啼く。しかも何處にか似通つた韻律を持ち、その韻律の中にはまた同じ樣な寂しさが含まれてゐるのを思ふ。杜鵑、駒鳥は鋭くて錆び、郭公、筒鳥、呼子鳥、山鳩のたぐひはすべて圓みを帶びた聲の、しかも消しがたい寂しさをその啼聲の底に湛へてゐる鳥である。筒鳥と呼子鳥とは同じものだといふ人もあるが、よく聞くと矢張り違ふ。筒鳥は大きく、呼子鳥の聲は小さい。初め私はこれを親鳥雛鳥のちがひだと思うたが、耳を澄ませば確かに違つて居る。筒鳥は大きく、呼子鳥は小さい。一は晝間の日の光りかがよふ溪間によく、一は日暮方の木立の奧に聞くべき鳥である。杜鵑は空を橫切る姿がよく、思はずも聞きつけたその一聲二聲が甚だいゝ。續けば或は耳につくかも知れない。郭公のたぐひには私は終日耳を傾けてなほ飽きない。

それらの鳥を最も多く聞いたのは山城の比叡山々中の古寺に泊つてゐた時であつた。彼處は全山が寺領で、それこそ空を掩ふ大きな杉がぎつちりと生ひ茂り、銃獵を許さぬのであゝまで鳥が多いのだらうと思はれた。然し、少し山深い所に行けば大抵の所ではこのうちのどれかは聞ける。郭公はなかなか姿を見せぬ鳥だといふが、上州の草津から信州の澁へ白根山の中腹を縫うて越した時、其處の噴

火の山火事あとの落葉松林の梢から梢へ移る姿を見た。年老いた案内者は、『はアあれかね、あれはハツポウ鳥だよ』と事もなげに言ひすてた。湴峠の頂上に近づくと五月の中ばすぎといふに、雪は一面に栂や樅の森林を埋めつくし、その梢ばかりが僅かに表はれてゐる荒凉たる原野の樣な中で、杜鵑と郭公とはかたみがはりに啼いてゐたのであつた。

山深いところなどで不圖聞きつけた松風の音や遠い谷川のひゞきに我等はともすると自分の寄る邊ない心の姿を見るおもひのすることがある。然し、松風や水のひゞきは終(つひ)に餘りに冷たく、餘りに寄る邊ないおもひがしないではない。それに比べて私は遙かにこれらの鳥の啼く音に親しみを持つのである。カツコウ、カツコウと啼くあの靜かな寂しい溫かい聲を聞いてゐると、どうしても私は眼を瞑ぢ頭を垂れ、其處に自分の心の迷ひ出で丶居る寂しさ溫かさを覺えずにはゐられないのだ。

うき我をさびしがらせよ閑古鳥

芭蕉の閑古鳥はたしかに郭公鳥の事であらねばならぬ。東北の或る地方ではまたこの鳥を豆蒔鳥とも呼ぶさうだ。ソレあの鳥が啼く、豆を蒔けといふのであらう。い丶名だとおもふ。

海も强ち(あながち)にいけないのではない。海ならば岬が好きだ。また、島もい丶、入江も若葉にふさはしく、奧深い港もこの頃靜かである。外洋そのものはどうも秋の風の冴えた頃がい丶樣に思はれる。

紀州の熊野浦、勝浦の港に入らうとする頃であつた。五月雨の雲の斷間に遙かの山腹に奈智の瀧の見えた時の感興を忘れ得ない。そしてその勝浦港の港口、崎山の茂みの蔭にある赤島溫泉に二三日雨に降りこめられながら鰹の大漁に舌皷を打つたことも思ひ出さる丶。

瀨戸内海の中でも鯛漁の本場だと言はれてゐる備前沖の直島に鯛網を見に行つたも五月であつた。島は極めて小さい島だが、其處に崇德上皇の流され給うた遺跡があつた。島の八幡宮の神官に案内せられて其處へ行くと、何のそれらしい面影もなく、たゞ一面に小松の立ち並んでゐる浪打際の山の蔭であつた。伸び揃うた小松のしんの匂ひが寂しい心を誘ふのみであつた。琴彈濱といふ所で鯛を取つて、これも折からの雨に濡れながら松蔭の海人の小屋で、さまぐ\に料理して貪り喰うた事も忘れ難い。夜に入つて小松ばかりの島山の峯づたひに船着場まで歸らうとすると、ちやうど晴れそめた望の夜の月が頭上にあつた。うち渡す島から島への眺めに時を忘れて、定期の發動機船に乘り遲れ、わざく\小舟をしたて丶備前地までその月の夜を漕がせた事をも思ひ出す。

繁山の岬のかげの八十島(やそしま)をしまづたひゆく小舟ひさしき

したたかにわれに喰はせよ名にし負ふ熊野が浦はいま鰹時

むさぼりて腹な破りそ大ぎりのこれの鰹の限りは無けむ

琴彈の濱の松かぜ斷えぬると見れば沖邊を雨のゆくなり

山や海の事ばかり書いてゐた。京都の嵯峨から御室、嵐山から清凉寺大覺寺を經て仁和寺に到るあたりの青葉若葉の靜けさ匂はしさを何に譬へやう。單に青葉若葉と云はない。あのあたり一面におほい松の林の松の花、蕪村が歌うた

若竹やゆふ日の嵯峨となりにけり

の篁つゞきの竹の秋の風情、思ひ起すだに醉ふ樣な心地がする。

また、新藥師寺唐招提寺の古い御寺をたづね歩いて、過ぎ去り過ぎゆく『時』のかをりに身を沈め、奈良の春日の森の若葉の中に入り行く心を誰に告げ得やう。鹿の子の群れあそぶ廣い〳〵馬醉木の原は漸くあの可憐な白い花に別れやうとする頃である。若草山のみどりは漸く深く、札所九番の南圓堂の鐘の音に三笠山の峯越しの雲の輝きこもる頃である。

吾子つれて來べかりしものを春日野に鹿の群れをゐる見ればくやしき

葉を喰めば馬も醉ふとふ春日野の馬醉木が原の春すぎにけり

奈良見人つらつら續け春日野の馬醉木が原に寢てをれば見ゆ

つばらかに木影うつれる春日野の五月の原をゆけば鹿鳴く

思ひ起し、書きつらねて行けばまことに際がない。

私のこの文章を書いてゐるのもまた旅さきに於てである。伊豆天城山の北の麓、狩野川の上流に當る湯ヶ島溫泉にもう十日ほど前から來てゐるのだ。來た頃に咲きそめた山ざくらは既に名殘なく散つて、宿の庭さきを流るゝ溪川に鳴く河鹿の聲が日ましに冴えてゆく。晴れた日に川原に落つる湯瀧に肩を打たせながら見るとなく、仰ぎ見る山の上の雲の輝きは何と云つてももう夏である。

彼處か此處か、行つて見度いところを心に描いてゐると、なか〳〵斯うぢつとしてゐられない氣持である。旅にゐてなほ旅を思ふ、自づと苦笑せずにはゐられない。（四月十一日、湯ヶ島湯本館にて）

夏のよろこび

底深い群青色の、表ほのかに爍りて弓形に張り渡したる眞晝の空、其處には力の滿ち極まつた靜寂(しじま)の光輝(かがやき)があり、悲哀(かなしみ)がある。

朝燒雲、空のはたてに低く細くたなびきて、かすけき色に染まりたる、野に出で、見よ、滴る露の中に瓜の花と蜂の群とが無數に喜び躍つてゐる。

向日葵の花、磨き立てた銅盥(かなだらひ)の輝きを持つて、によつきりと光と熱との中に咲いてゐる。歩み移る太陽の方にかすかに面を傾くるといふにもこの花のあはれさが感ぜられる。づばぬけて大きいだけになほ。

夜。空氣も濡れ、燈火も濡れ輝いてゐる。ほのかに汗ばむアイスクリームの湯氣。

晝寢。したゝかに吸ひ太りたる蚊のよちよちとまひゆける下、疊よ、氷の如く冷かなれ。

夏の言葉

ひんがしの白みそむれば物かげに照りてわびしきみじか夜の月

疲れつつ起き出で來ればみじか夜の月殘りゐて黍の葉の影

夙く起きて靜かに居れば庭さきの黍の葉ずゑの露もまだ散らず

柹の葉の青きもわれのさびしきもひたすらにして露もこぼれず

これらはすべて夏の曉を歌つたものである。

私は夏めいて來ると大抵毎朝二時から三時の間に起きる。直ぐ机に向つて爲事にかゝる事もあれば、何といふ事なく唯だ煙草に火をつけて、命みじかいこの曉の靜けさに浸つてゐることもある。

つかれたる人のみぞ知るしののめの露の干ぬ
間のこのたのしさは

私は寧ろこの夏の朝の疲勞を愛するものである。いかにも遣瀬なく、そしてまたいかにも淸らかな感じのする疲れである。

葉末のつゆのこぼれやうこぼれまいとするあの氣持が確にこの疲勞にはある様だ。かすかなほてりを帶びた身體を包む此頃の曉の大氣の冷かさも心憎い。身體はしつとりと疲れて、瞳ばかりが冷かに澄んでゐるのを感ずる。

とほり雨すぎてダリヤの園に照る葉月の朝の
日のいろぞ憂き
肺もいまあはき疲れに蒼むめりダリヤの園の
夏の朝の日
けふも晴るるか暗きを慕ふわがこころけふも
燃ゆるか葉月の朝空
枝に葉にやどり輝く夏の日のひかりかなしき
この朝かな

夏の朝の斯うした心持を歌つたものは私にはなほ少くない。

井戸端にわが浴び浴ぶる水の音水のたえまに
かなかなきこゆ
しみじみと朝空あふぎ立ちつくす夏の眞土の
つめたき上に
起き出でて跣足に立てる朝の庭つめたき土に
媚ぶるこころか
夏はいまさかりなるべしとある日の明けゆく
空のなつかしきかな
此處はなほ物かげなれど朝空をかがやきてゆ
く白鷺の鳥

此等には疲勞の氣持は含まれてゐないかも知れぬが、而かも或る靜けさに浸つて身を固めた心は同じである。

朝が次第に闌けて、張り渡した大空に浮雲ひとつ見えず、唯だかすかに燻り煙る様な輝きを持つ夏

の眞晝もまた私の好きな一つである。手足ひとつ動かすにもゆるがせに出來ぬ心持である。まばたき一つするのもかりそめならぬ張り詰めたあの氣持である。

いはけなき涙ぞ流る燕啼きうす青みつつ晝更くるなかに

しばらくはうつつともなく眞がなしき夏の眞晝のわれにしありけり

とほき木に蟬の鳴き入りゆくりなく鳴り出でし時計音のわびしも

窓漏れてあざやけきかな七月の青きひかりはわれの机に

朝が早いので私は每日午睡をする。窓から軒から照り入つた光より逃れる一つの手段でもあるのだ。

かがやきて睡りは來る午ちかみ窓邊の木の葉照り青むなかに

晝焚きて机のかげにおきたればほのぼの昇る

蚊遣香のけむり

私はひとの言ふほど夏の夜の風情に心を動かされぬ。ひとつは每晩の晩酌から大抵食後ほどなく眠つてしまふためかも知れぬ。然し、夜を歌うたものが無いではない。

蚊帳に見ゆる夜ふけの風のつめたきにこころ覺めをれば蚊のなく聞ゆ

をりをりに吹き入る風の蚊帳をあふりこころ淋しも秋のごときに

いまをかも露のおくらむ夜あかりに長く垂れたる黍の葉の見ゆ

みじか夜のいつしか更けて此處ひとつあけたる窓に風の寄るなり

うろこ雲空にながれてしらじらと輝けるかげの夏の夜の月

夏はよく私は草花や野菜などを植ゑてたのしむ。これもこの季節の疲勞を愛し、靜けさを好む心から來たものゝ樣に思はれる。

草花を見るのも、畑の草をいぢるのも、矢張り朝が一番たのしい。

眼に見えて肥料（こやし）利きゆく夏草のとりどりの花
は咲きそめにけり

朝夕につちかふ土の黒み來て鳳仙花の花散り
そめにけり

一重咲ダリヤの花のくれなゐの澄みぬるかな
や梅雨ばれの風に

居て見るやならびて咲ける草花の色香とりど
りに飽く花ぞなき

眞白くぞ夏萩咲きぬさみだれのいまだ降るべ
き庭のしめりに

泡雪の眞白く咲きて幹につく鳳仙花の花の葉
ごもりぞよき

葱苗のいまだかぼそくうす青き庭の畑は書齋
より見ゆ

疲れと靜けさに浸る心は、自づと人目を避くることになり易い。そして、ぽつちりと眼を開いて、何を見るともなく見詰めてをる。

青みゆく庭の木草にまなこおきてひたに靜か
に籠れよとおもふ

めぐらせる大生垣の槇の葉の伸び淸らけし籠
りゐて見れば

生垣の槇の若葉のいろ深み土用わびしき風は
吹くなり

焚く香のにほひほのかにこもりたる夏（け）ごもり
のわが部屋をよしとす

北南あけはなたれしわが離室（はなれ）に獨りこもれば
木草見ゆなり

苔のうへ這ひ行く蟻にこころとまるわびしき今日を庭木吹く風

心憂く部室にこもれば夏の日の光わびしく軒にかぎろふ

なまけつつ心くるしきわが肌の汗吹きからす夏の日の風

なまけをるわが耳底に浸みとほり鳴く蟬は見ゆ軒ちかき松に

門口を出で入る人の足音にこころ冷えつつなまけ籠れり

なまけゐて苦しき時は門に立ち仰ぎわびしむ富士の高嶺を

私のいま住んでゐる家の門口からは眞正面に富士の山が仰がるゝ。雪の消えたこの山の遠いいたゞきも孤獨な心にはよき友である。

雲まよふ梅雨あけ空のいぶせきにあかつきばかり富士は見らるる

むらさきに澄みぬる富士はみじか夜の曉起きに見るべかりけり

めづらしくこの朝晴れし富士が嶺を藍色ふかき夏空に見つ

たづね來てとまれる人をゆり起す夏めづらしき今朝の富士見よ

陰ふくみ湧きたちさわぐ白雲のいぶせき空に富士はこもれり

富士の前にある愛鷹山（あしたかやま）は、謂はゞ富士の裾野の一部とも見るべく、同じく大きななだらかな裾野を持つてをるが、その野の繁い襞から襞にかけて朝々眞白な雲が湧く。

明方の山の根に湧く眞白雲わびしきかなやとびとびに湧く

愛鷹の根に湧く雲をあした見つゆふべ見つ夏

の終りとおもふ

愛鷹に朝ゐる雲のたなびかば晴れむと待てや富士の曇りを

夕立雨がをり〳〵山から降つて來る。

さやさやと音立てて來し雨脚のいま降りかかる窓さきの木に

飯かしぐゆふべのけむり庭に這ひてあきらけき夏の雨は降るなり

はちはちと降りはじけつつ荒庭の穗草がうへに雨の降るなり

漸くかすかな食慾がついて來る。

何はなくたべむとおもふたべものも秋めくものか籠りてをるに

いささかの蜆煮なむと眞清水にひたし生けおく夏のゆふぐれ

斯うしていつの間にか永かつた夏も盡きて世は秋のにほひに移つてゆくのである。永かつたとツイ言つたが、實は私にとつては夏はたゞ短く速くのみ過ぎてゆくおもひがする。ことにあの照り澄んだ太陽、輝き入つた大地の眞夏の力と靜けさとはほんの一瞬にして過ぎてゆく樣におもはれてならない。そして名もない俚人の歌うた「土用なかばに秋風ぞ吹く」のわびしさあはれさがいちはやく身にしみて來るのをおもふ。

畑中の小みちを行くとゆくりなく見つつかなしき天の河かも

うるほふとおもへる衣（きぬ）の裾かけて埃はあがる月夜の路に

野末なる三島の町の揚花火月夜の空に散りて消ゆなり

秋づけるもののけはひにひとのいふ土用なかばの風は吹くなり

四邊の山より富士を仰ぐ記

駿河なる沼津より見れば富士が嶺の前に垣な
せる愛鷹(あしたか)の山

東海道線御殿場驛から五六里に亙る裾野を走り下つて三島驛に出る。そして海に近い平地を沼津から原驛へと走る間、汽車の右手の空におほらかにこの愛鷹山が仰がるる。謂はゞ蒲鉾形の、他奇ない山であるが、その峯の眞上に富士山が窺(のぞ)いてゐる。

いま私の借りて住んでゐる家からは先づ眞正面に愛鷹山が見え、その上に富士が仰がるゝ。富士といふと或る人々からは如何にも月並な、安瀬戸物か團扇の繪にしかふさはない山の樣に言はれないでもないが、この沼津に移住して以來、毎日仰いで見てゐると、なかなかさう簡單に言ひのけられない複雜な微妙さをこの山の持つてゐるのを感ぜずにはゐられなくなつてゐる。雲や日光やまたは朝夕四季の影響が實に微妙にこの單純な山の姿に表はれて、刻々と移り變る表情の豐かさは、見てゐて次第にこの山に對する親しさを增してゆくのだ。

一體に流行を忌む心は、もう日本アルプスもいやだし、富士登山も唯だ苦笑にしか値しなかつた。與謝野寛さんだかゞ歌つた「富士が嶺はをみなも登り水無月の氷の上に尿垂るてふ」といふ感がしてならなかつた。それで今まで頑固にもこの名山に登ることをしなかつたが、こちらに來てこの山に親しんで見ると、さうばかりも言へなくなり、この夏は是非二三の友人を誘つて登つてゆき度い希望を抱くに到つてゐる。

閑話休題、朝晩に見る愛鷹を越えての富士の山の眺めは、これは一つ愛鷹のてつぺんに登つて其處から富士に對して立つたならばどんなにか壯觀であらうといふ空想を生むに至つた。ところが其頃私の宅にゐた土地生れの女中は切にこの思ひ立ちを危ぶんで、愛鷹には魔物がゐると昔から言ひなされて、土地の者すらまだ誰一人登つたといふ話を聞かぬ、何も好んでそんな山へ登るにも當るまいと頻りに留めるのだ。妻は無論女中の贊成者であつた。それこれで暫くその愛鷹登りが滯つてゐたが、次第に秋が更けて、相重なつた二つの山の輪廓がいよいよ鮮かになり、ことにその前の山の中腹以上にある森の紅葉がはつきりと我等の里から見える樣になると、もうとても我慢が出來なくなり、細君たちの安心を請ふために私は自宅の書生を伴れて、或る晴れた日にその頂上をさして家を出た。

最初私の眼分量できめた豫定は宅を朝の六七時に出て十一時には頂上に着く、そして一二時間を其處で休んで歸りかける、歸りみちにはあたりの松山で初茸でも取つて來やうといふ樣なことであつた。

ところが登りかけて見て少なからず驚いた。行けども〳〵同じ樣な輕い傾斜の裾野路が續いて、頂上に着く筈の十一時にはまだ山らしい坂にもかゝる事が出來ずにゐた。

愛鷹山は謂はゞ富士の裾野の一部ににょつきりと隆起した瘤の樣なもので、山の六七合目から上は急峻な山嶽の形をなしてゐるが、それより下は一帶の富士の裾野と同じく極めてなだらかな、そして極めて細かな襞の多い、輕い傾斜の野原となつてゐるのである。で、こちらから望んだ丈では地圖の示す通りの海拔四千四五百尺の普通の山であるが、サテ實際に登りかけて見ると今言つた通り、こちらからは一寸見に解らないだらしのない野原をいつまでも〳〵歩いてゆかねばならなかつたのだ。

幸に麥蒔時で、その廣大な裾野にそちこちと百姓が麓の里から登つて麥を蒔いてゐた。それでなくては到底何處が何處だか路などの解る野原ではないのであつた。百姓達はみんな我等二人の言ふのを聞いて一笑に附し去つた。今からなどとても〳〵峠まで行けるものでない、それよりも今から路を少し右にとつて、山の中腹にある水神さまにでも參つたがよいであらう、其處へならまだ行つて歸る時間もあらうし、若し遲くなれば其處の堂守に賴んで泊めても貰へると言ふのだ。さう言はれると落膽もし癪にもさはつた。殘念さうに私が返事もせずに山のいたゞきを望んで立つてゐるのを見た彼等の中の一人の若者は――彼等は丁度晝飯を喰つてゐた――笑ひ〳〵立ち上つて來てその山の方を指ざしながら、それなら斯うしたらどうだ、ソレあの山の八合目にかけた森の中に土龍の形に似た枯草の野があるだらう、あれはこの麓の村から牛馬の飼料を刈りにゆく草場で、その形からこの邊ではムグラツトと呼んでゐる、今はもう草刈時でもないが兎に角あそこまでは細い道がついてゐる、あそこまで登つて、そしてまア頂上まで行つたつもりになつて其處から降りて來るのだ、あれから先は路もないし、とても深い森でなか〳〵登れるわけのものでない、ムグラットまで行つたにしても歸りは夜に入るが、兎に角麓の村まで出て來ればまたどうとでもなるだらう、と言ふのだ。

兩人(ふたり)は顏を見合せたが、それでも水神樣にゆくよりその方が多少心を慰められる氣がしたので、若者に禮を言ひ捨て、急いでその森の中の枯草の野へ向けて足を速めた。それからは兩人とも急に眞劍にならざるを得なかつた。腹も空いたが大事をとつてムグラットまでは辨當を開かぬ事とし、もう今までの無駄口も自づと消えて只だひたすらに急いだ。間もなく流石に長かつたたら〳〵登りも盡きて山らしい坂になつた。畑もなくなり、人影も見えなくなつた。ともすれば見失ひがちの小徑は水の涸れた谷をあちこちと橫切つて多く笹の原の中を登つて行つた。そして程なく欝蒼たる森林地に入り込んだ。

裾野の廣いのに驚いたと同じく、この中腹からかけての森の大きく美しいのもまた私を驚かした。沼津あたりから見るのでは、中腹以上が一帶にうす黑く見渡されて其處が森をなしてゐることだけはよく解るが、たゞ普通の灌木林か乃至は薪炭を作る雜木林位ゐにしか考へられなかつた。いま眼の前

に見るその森の木は灌木どころかすべて一抱へ二抱への大木で、多くは落葉樹、そしてもうその紅葉は半ばすぎてゐた。しかも眼の及ぶ限りその落葉しかけた大木が並び連つて寂然とした森をなしてゐるのである。少し樹木の開けた所から見れば、峯から谷へ、谷から峯へ、峯から峯へ、すべて山の窪み高みを埋めつくして鬱然と押し擴がつてゐるのであつた。

樹木好きの、森好きの私はそれを見るに及んで、一時沈み切つてゐた元氣を急に恢復した。昨今頻りに散り溜りつゝある眞新しい落葉をざく／＼と踏みながら、ほんとに檻から出た兎の様な面白さで、這ひながら走りながらその深い／＼森の中の木がくれ徑を登つて行つた。考へて見れば其處の森は御料林の一つで、今時珍しい木深さなども故あることであつたのだ。

大君の御料の森は愛鷹(あしたか)の百重(ももへ)なす襞にかけて
しげれり

大君の持たせるからに神代なす繁れる森を愛
鷹は持つ

この山のなだれに居りて見はるかす幾重の尾
根は濃き森をなせり

蜘蛛手なす老木の枝はくろがねのいぶれるな

して落葉せるかも

時すぎて今はすくなき奥山の木の間の紅葉か
がやけるかな

一しきりその森を登つてゆくと間もなくそのムグラットに出た。これも遠目と違つてなか／＼大きな草原であつた。荒々しく枯れ靡いてゐる草を押し分けて――もうその草原に來ると路は絶えてゐた――その一番高い所まで登つてゆくと、其處に兩人ともがつくり倒れてしまつた。

たのしみ／＼手をつけずに持つて來た二合壜の口を開いて喇叭飲を始める頃になると、漸く私にも眼を開いて四方の遠望を樂しむ餘裕が出て來た。よく晴れた日で、前面一體には駿河灣が光り輝き、その左に伊豆半島、右手に御前崎が浮び、山の麓の海岸には沼津の千本松原からかけて富士川の川口の田子の浦、少し離れて三保の松原も波の間に浮んで見える。明るい大きな眺めではあるが、矢張り富士の見えないのが寂しかつた。その富士はツイ自分等の背後峯の向うに立つてゐる筈なのである。

酒の勢、腹の滿ちた元氣で、我等はまたその草原から上の森林の中へ入り込んで行つた。今來た道を沼津へ出ようとすればこそ夜にもなるが、頂上から最も手近な麓の村へ一直線に降りる分にはどうにか日のあるうちに降りられよう。頂上には小さなお宮があると聞くので、屹度何處へか通ずる道があるに相違ない。折角此處まで來て富士を見ぬのは何とも氣持の惡い話だといふ様な事から、時計が

既に午後の二時をすぎてゐるのにも構はず、それこそ脱兎の勢で登り始めたのであつた。

既に草原に絶えた路はそれ以上にある筈はなかつた。然し、大體の見當では其處の一つの尾根を傳つてさへ行けば十町か二十町の間に必ず頂上へ出るといふ見込をつけたのであつた。もう樹木を見るの紅葉を見るのと云ふのでなかつた。また、其處から上はやがて樹木は絶えて打續いた篠竹の原となつてゐた。一間から二間に伸びたその根の方を殆んど全く這ひ續けて分け登つたのであつた。

辛うじて頂上に出た。案の如く富士山とぴつたり向ひ合つて立つことが出來た。然し、最初考へたが如く、一絲掩はぬ富士の全山を其處から見ると云ふことは不能であつた。たゞ一片の蒲鉾を置いた樣にたゞ單純に東西に亙つて立つてゐるものと想像してゐたこの愛鷹山には、思ひのほかの奥山が連り聳えてゐるのであつた。沼津邊からはたゞその前面だけしか見えぬのだが、その背後に寧ろ前面の頂上よりも高いらしい山嶺が三つ四つごた〳〵と重つてゐるのであつた。しかも自分等の立つた頂上からも最も手近に聳えた一つの峯は我等の立つてゐる山とは似もつかず削りなした樣な嶮しい岩山であつた。その切り立つた岩山を抱く樣にして、大きく眞白く、手に取る樣な眞近な空にわが富士山は聳え立つてゐるのであつた。しげ〳〵とそれを仰いで坐つてゐると、我等の登つて來たとは反對の山あひに幾疋か群れてゐるらしい猿の鳴くのが聞えて來た。

眞裸體の富士山を見ようといふねがひは前の愛鷹山で見ごとに失敗した。然し、何處かでさうした富士を見ることが出來るであらうといふ心はなか〳〵に消えなかつた。

そして寧ろ偶然に足柄と箱根との中間にある乙女峠を越えようとしてその願ひを果したのであつた。私はその時箱根の蘆の湖から仙石原を經て御殿場へ出ようとしてこの峠にかゝつたのであつた。乙女峠の富士といふ言葉を聞いてはゐたが實はその時極めてぼんやりとその峠へ登つて行つたのであつた。當時の事を書いた紀行文を左に拔萃する。

登りは甚だ嶮しかつたが、思つたよりずつと近く峠に出た。乙女峠の富士といふ言葉は久しく私の耳に馴れてゐた。其處の富士を見なくてはまだ富士を語るに足らぬとすら言はれてゐた。その乙女峠の富士をいま漸く眼のあたりに見つめて私は峠に立つたのである。眉と眉とを接する思ひにひた〳〵と見上げて立つ事が出來たのである。まことに、どういふ言葉を用ゐてこのおほらかに高く、淸らかに美しく、天地にたゞ獨り寂しく聳えて四方の山河を統ぶるに似た偉大な山嶽を讃めたゝふることが出來るであらう。私は暫く峠の眞中に立ちはだかつたまゝ、靜かに空に輝いてゐる大きな山の峯から麓を、麓から峯を見詰めて立つてゐた。そして、若しその峠へ人でも通り合せてはといふ懸念から路を離れて一二町右手の金時山の方に登つて、枯芒の眞深い中に腰を下した。富士よ、富士よ、御身はその芒の枯穗の間に白く〳〵淸く〳〵全身を表はして見えてゐて呉れたのである。

乙女峠の富士は普通いふ富士の美しさの、山の半ば以上を仰いでいふのと違つてゐるのを私は感じた。雪を被つた山巓も無論いゝ。がこの峠から見る富士は寧ろ山の麓、即ち富士の裾野全帶を下に置いての山の美しさであると思つた。かすかに地上から起つたこの大きな山の輪廓の一線はそれこそ一絲亂れぬ靜かな傾斜を引いて徐ろに空に及び、其處に淸らかな山巓の一點を置いて、更にまた美しいなだれを見せながら一方の地上に降りて來てゐるのである。地に起り、天に及び、更に地に降る、その間一毫の掩ふ所なく天地の間に已れをあらはに聳えてゐるのである。しかもその山の前面一帶に擴がつた裾野の大きさはまたどうであらう。東に籠坂峠足柄山があり、西に十里木から愛鷹山の界があり、その間に抱く曠野の廣さは正に十里、十數里四方にも及んでゐるであらう。しかもなほその廣大な原野は全帶にかすかな傾斜を帶びて富士を背後におほらかに南面して押し下つて來てゐるのである。その間に動いてゐる氣宇の爽大さはいよ／＼背後の富士をして獨りその高さを擅ならしめてゐるのである。

伊豆の天城から見た富士もまた見ごとなものであつた。愛鷹からと云ひ乙女峠からと云ひ、贅澤を言ふ樣だが實は少々近過ぎる感がないではなかつた。丁度の見頃だとおもふ距離をおいて仰がるゝのはこの天城山からであつた。

天城も下田街道からでは恰好な場所がない。舊噴火口のあとだといふ八丁池に登る途中からは隨所

に素晴しい富士を見る事が出來た。高山に登らざれば高山の高きを知らずといふ風の言葉を幼い時に聞いた記憶があるが、全く不意にその言葉を思ひ出したほど、登るに從つていよ／＼高くいよ／＼美しい富士をうしろに振返り／＼その八丁池のある頂上へ登つて行つたのであつた。

天城もまた御料林である。愛鷹と比べて更に幾倍かの廣さと深さとを持つた森林が山脈の峯から峯へかけて茂つてゐる。その半ばからは杉の林であるが、上は同じく落葉樹林である。私の登つたのは梢にまだ若葉の芽を吹かぬ春のなかばであつたが、鑛物化した樣なその古木の林を透かして遙かに富士をかへりみる氣持は實に崇嚴なものであつた。

高山に登り仰ぎ見たか山の高き知るとふ言の
よろしさ

天地の霞みおどめる春の日に聳えかがやくひ
とつ富士が嶺

わが登る天城の山のうしろなる富士の高きは
仰ぎ見飽かぬ

山から見た富士ばかりを書いた。最後にひとつ海を越えて見た富士を記してこの文を終る。これは曾て伊豆の西海岸をぼつ／＼と歩いて通つた紀行の中から拔いたものである。

今度は獨りだけに荷物とてもなく、極めて暢氣に登つて行くとやがて峠に出た。何といふことはなく其處に立つて振返つた時、また私は優れた富士の景色を見た。いま自分の登つて來た樣な雜木林が海岸沿に幾つとなく起伏しながら連つてゐる。その芝山のつらなりの間に、遙かな末に、例のごとく端然とほの白く聳えてゐるのである。海岸の屈折が深いから無數の芝山の間には無論幾つかの入江があるに相違ない。その汐煙が山から山を一面にぼかして、輝やかに照り渡つた日光のもとに何とも云へぬ寂しい景色を作つてゐるのである。現にいま老人と通つて來た阿良里と田子との間に深く喰ひ込んだ入江などは眼の醒むる樣な濃い藍を湛へて低い山と山との間に靜かに横はつて見えて居る。磯には雪の樣な浪の動いてゐるのも見ゆる。私は其儘其處の木の根につくねんと坐り込んで、いつまでも〳〵この明るくはあるが、大きくはあるが、何とも云へぬ寂びを含んだながめに眺め入つた。富士の景色で私の記憶を去らぬのが今までに二つ三つあつた。一つは信州淺間の頂上から東明の雲の海の上に遙かに望んだ時、一つは上總の海岸から、恐ろしい木枯が急に吹きやんだ後の深い朱色の夕燒の空に眺めた時、その他あれこれ。今日の船の上の富士もよかつた。然しそれにもまして私はこの芝山の間に望んだ寂しい姿をいつまでもよう忘れないだらうと思ふ。

この中に「信州淺間の頂上から云々」とある。その廣々とした雲海の上に聳えて私の眼についた二つの山があつた。一つは富士、これはその特殊の形からすぐ解つた。今一つは細く銳く尖つた嶺の上にかすかに白い煙をあげた飛驒の燒嶽であつた。

その燒嶽に昨年の秋十月、普通の登山者の絕え果てた時に私は登つて行つた。よく晴れた日で、濛々と煙を噴きあげてゐるその頂上に立つて見てゐると、西に、北に、南に、東に、實に無數の高い山がうす紫の秋霞の靡いた上にとび〳〵に見渡された。その中に矢張りきつぱりと一目にわかる富士の山が遙かの〳〵東の空に望まれたのであつた。

梅の花櫻の花

きさらぎは梅咲くころは年ごとにわれのここ
ろのさびしかる月

梅の花が白くつめたく一輪二輪と枯れた樣な枝のさきに見えそむる。吹きこめた北の風西の風がかすかな東風にかはらうとする。その頃になるときまつて私は故のない憂欝に心を浸されてしまふ。眼をあけてゐるのもいやだが、而かも心の底は明るく冷やけく澄んで居る。爲事のいやになるのもこの頃である。煙草のいゝのを喫ひたくなるのもこの頃である。

あたりの木々も、常磐樹ならば金屬の樣に黑く輝き、落葉樹ならばたゞ明るく靜けく枯れた樣に立つてゐる。根がたの草はみなひとしく枯れ伏してうすら甘いその頃の日ざしを含んでゐる。さうしたなかに一りん二りんと咲き出づる梅の初花を私は愛する。

年ごとにする驚きよさびしさよ梅の初花を今
日見出でたり

梅咲けばわがきその日もけふの日もなべてさ
びしく見えわたるかな

梅の花はつはつ咲けるきさらぎはものぞおち
ゐぬわれのこころに

然し何と云つても春は櫻である。それもお花見場所の埃つぽいのは花のおもひかせぬ。靜かな庭に咲き出でた一本二本、雨の後などとりわけて鮮けく、照り澄んだ日ざしのなかにほくらほくらと散り澄んで輝いてゐるのもいゝ。

夕靄(ゆふあかり)暮れおそきけふの春の日の空のしめりに
櫻咲きたり

雨過ぎししめりのなかにわが庭の櫻しばらく
散らであるかな

ひややけき風をよろしみ窓あけて見てをれば
櫻しじに散りまふ

春の日のひかりのなかにつぎつぎに散りまふ

櫻かがやけるかな

さういふうちにも私はほんたうの山櫻、單瓣の、雪の樣に白くも見え、なかにかすかな紅ゐを含んだとも見ゆる、葉は花よりも先に萌え出でて單紅色の滴るごとくに輝いてゐる、あの山櫻である。これは都會や庭園などには見かけない、どうしても山深くわけ入らねばならぬ。

うす紅(べに)に葉はいちはやく萌え出でて咲かむとすなり山ざくら花
花も葉も光りしめらひわれのうへに笑み傾ける山ざくら花
かき坐る道ばたの芝は枯れたれやすわりてあふぐ山ざくら花
うらうらと照れるひかりにけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花
刈りならす枯萱山の山はらに咲きかがよへる山ざくら花

若葉の山に啼く鳥

今月號の或雜誌に佛法僧鳥のことが書いてあつた。棲むところはきまつてゐて夏のあひだだけ啼く鳥なのかと思つてゐたら、遠く南洋の方から渡つて來て秋になればまた海を渡つて歸つて行く鳥であるさうだ。

私たちの結婚した年であつたから恰度今から十一年前にあたる、武藏の御嶽山に一週間ほど登つてゐた事がある。山上のある神官の家に賴んで泊めて貰つてゐた。ある夜、私は其處の厠に入つてゐた。普通の家のよりずつと廣い厠であつた。良い月の夜で、廣やかな窓から冴えた光がいつぱいに射しこんでゐた。其處へ聞きなれぬ鳥の聲が聞えて來た。何でもツィ厠に近い樹の梢からであつた。

私の癖の永い用を足して自分の部屋に歸つたが、閉め切つた雨戸を漏れてなほその澄んだ聲が聞えて來る。ランプの灯影にぢいつと耳を傾けてゐたが、僅の定つた時をおいて續けさまに聞えて來るその鳥の聲のよさに私はたうとう立ちあがつて戶外へ出た。そしてあの樹であらうと思つてゐた何やら大きな樹の根がたに步み寄つた。然しその時は其處とは少し離れた他の樹の梢にその聲は移つてゐ

た。足音を忍ばせてその樹へ近づいて行つたが、それを知つたかどうか、またその先の杉の樹に啼き移つてゐた。毎晩霧の深いに似ず、その夜はまつたくよく晴れて、見渡す峰といふ峰は青みを帶びてくつきりと冴え、眼下の谷を埋めて立ち竝んでゐる杉の一本一本の梢すらも見分けられさうな月夜であつた。其處へその鳥の聲だけがたつた一つ朗かに冴えて響いてゐるのである。鋭いといふでなく、圓みを持つた、寂びた聲で、幾分の濕りを帶びながら、石の上を越え落つる水の樣になめらかに聞えて來るのである。

次第に昂奮した心で私は飽くことなくその聲を追うて山の傾斜の落葉の上を這ひながら立ち込んだ杉の樹の根から根を傳つて行つた。どうかその聲の落ちて來る眞下でとつくりと聽き入りたかつたからである。けれど一聲か二聲を啼き捨てゝは次の樹へ移るこの鳥にはとても追ひつくことは出來なかつた。ほどほどで諦めてぴしよ〳〵の朽葉を踏みながら宿の庭まで歸つて來ると、相變らず月はよく冴え、恰も其の月の夜の山や川の魂でゝもあるかの樣に私にとつては生れて初めて耳にするこの不思議な鳥は澄んで寂しく聞えてゐたのであつた。翌朝、この事を宿の人に訊くと、それは佛法僧ですと敎へて呉れた。

驚きと昂奮とが先に立つて私はその時の鳥の聲がどんな風であつたかを明瞭に覺えてゐない。それから數年後のある初夏に山城の比叡山に登り、山上にある或る古い寺に滯在してゐた時、これによく似た鳥を聞いた。寺の僧に訊くと彼は筒鳥だと答へた。これを聞いたのは多く晝であつた。晝といつても午前三時頃から啼き出すので、谷には雲がおり空には月の冴えたなかに聞いたこともあつたのである。その時に書いた紀行の中にこの鳥のことを斯う書いてゐる。

日が闌けて木深い溪が日の光に煙つた樣に見ゆる時何處より起つて來るのだか、大きな筒から限りもなく拔け出して來る樣な聲で啼きたてゝる鳥がある。初めもなく終りもない、聽いてゐれば次第に魂を吸ひ取られてゆく樣な、寄るべない聲の鳥である。或時は極めて間遠に、或時は釣瓶打に烈しく啼く。この鳥も容易に姿を見せぬ。聲に引かれてどうかして一目見たいものと幾度も木の雫に濡れながら林深くわけ入つたが終に見ることが出來なかつた。筒鳥といふのがこれである。

この筒鳥といふのが若しかしたら佛法僧ではあるまいかと私は思つてゐる。右に引いたある雜誌には佛法僧の姿を『鳩より心持小さく羽毛全體綠色勝ち、頭は淡黑色、嘴は朱色をして短く末端が少しく曲り、背と腹は綠色、それにコバルト色の冴えた斑があり、翼は碧綠色をして約七寸ばかり、翼と尾の端は黑く濡れ羽色をしてゐる』と記したあとにその啼き聲を書いて『ホツホー、ホーホーホーホー』といふ風に啼くとしてゐる。これだと私の聞いた筒鳥とよく似てゐるのだ。

然し、いづれにせよこの鳥の啼き聲は到底文字などに書き現せるものではない。聲に何の輪廓がな

い。まつたく初めもなく終りもない。そしてこの鳥の啼いてゐる間、天も地もしいんとする樣な靜けさを持つた寂びた聲である。

これに似たものに郭公がある。これは『カッコウ、カッコウ』と二聯の韻を持つて啼きつゞける。筒鳥よりも一層寂しく迫つた調子を帶びてゐる。同じく明け方から晴れた日の晝にかけて啼く。降る日は聲が少い。雨にふさふのは山鳩であらう。

もう一つ、呼子鳥がある。これは一層よく筒鳥に似てゐる。矢張り文字には書けないが、先づ『ボンボンボンボンボン』と云つた風に啼きつゞける。筒鳥より聲も調子も小さく聞える。これは夕暮方によく啼いたとおもふ。

すべて若葉に山の煙るころから啼きそめる鳥である。榛名山に登る時、ずつとうち續いた小松の山の大きな傾斜に松のしんがほのぼのと匂ひ立つてゐるなかに聞いた郭公なども忘られ難い。奥州で豆蒔鳥と呼ぶのはこの郭公のことらしい。

若葉といひ、松のしんといひ、うちけぶつた五月晴の空といひ、そんなことを思ひ浮べると、どうしてもこれらの深山の鳥の啼く聲が身に浸み響いて來てならない。いま手をつけてゐる忙しい爲事を果したら早速三河の鳳來寺山に登るつもりである。この山は古來佛法僧の棲むので名高い山である。身延の奥の院七面山あたりにも啼いてゐることゝおもふ。

自己を感ずる時

生の歡びを感ずる時は、つまり自己を感ずる時だとおもふ。自己にぴつたりと逢着するか、或はしみじみと自己を嚙み味つてゐる時かだらうとおもふ。

さういふ意味に於て私にとつては矢張り歌の出來る時がそれに當る樣である。それも、うまく出來て呉れる時である。

歌が思ふ樣に出來る時は萬事萬物すべてが無意味でなくなつて來る。自分を初め、自分の周圍に在るすべてがいきいきと生きて來る。自分を中心としてめい〳〵が光を放つてゐる樣な明るさを感ずる。自分を中心として全てが成り立つてゐる樣な力を感ずる。初めて、我此處に在り、といふ歡びが五體の中に湧いて來るのを感ずる。

酒の讃と苦笑

それほどにうまきかとひとの問ひたらば何と
答へむこの酒の味

眞實、菓子好の人が菓子を、渇いた人が水を、口にした時ほどのうまさをば酒は持つてゐないかも知れない。一度口にふくんで咽喉を通す。その後に口に殘る一種の餘香餘韻が酒のありがたさである。單なる味覺のみのうまさではない。

無論口であぢはふうまさもあるにはあるが、酒は更に心で嚙みしめる味ひを持つて居る。あの「醉ふ」といふのは心が次第に酒の味をあぢはつてゆく狀態をいふのだと私はおもふ。斯の酒のうまみは單に味覺を與へるだけでなく、直ちに心の營養となつてゆく。乾いてゐた心はうるほひ、弱つてゐた心は蘇り、散らばつてゐた心は次第に一つに纒つて來る。

私は獨りして飮むことを愛する。

かの宴會などゝいふ場合は多くたゞ酒は利用せられてゐるのみで、酒そのものを味はひ樂しむといふことは出來難い。

白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒は靜かに飮
むべかりけり

酒飮めば心なごみてなみだのみかなしく頰を
流るるは何ぞ

かんがへて飮みはじめたる一合の二合の酒の
夏のゆふぐれ

われとわが惱める魂の黑髮を撫づるとごとく
酒は飮むなり

酒飮めば涙ながるるならはしのそれも獨りの
時にかぎれり

然し、心の合うた友だちなどゝ相會うて杯を擧ぐる時の心持も亦た難有いものである。

いざいざと友に盃すすめつつ泣かまほしかり

醉はむぞ今夜
語らむにあまり久しく別れゐし我等なりけり

いざ酒酌まむ
汝が顔の醉ひしよろしみ飲め飲めと强ふるこ
の酒などかは飲まぬ

朝の酒の味はまた格別のものであるが、これは然し我等浪人者の、時間にも爲事の上にもさまでに嚴しい制限の無い者にのみ與へられた餘德であるかも知れぬ。雨、雪など、庭の草木をうるほしてゐる朝はひとしほである。

時をおき老樹のしづく落つるごと靜けき酒は
朝にこそあれ

普通は晩酌を稱ふるが、これはともすれば習慣的になりがちで、味は薄い。私は寧ろ深夜の獨酌を愛する。

ひしと戸をさし固むべき時の來て夜半を樂し
くとりいだす酒

夜爲事の後の机に置きて酌ぐウヰスキーのコ
ブに蚊を入るるなかれ

疲れ果て眠りかねつつ夜半に酌ぐこのウヰス
キーは鼻を燒くなり

鐵瓶のふちに枕しねむたげに德利かたむくい
ざわれも寢む

醉ひ果てては世に憎きもの一もなしほとほと
我もまたありやなし

一刻も自分を忘るゝ事の出來ぬ自己主義の、延いて其處から出た現實主義物質主義に凝り固まつてゐる阿米利加に禁酒令の布かれたは故ある哉である。

洋酒日本酒、とり〴〵に味を持つて居るが、本統におちついて飲むには日本酒がよい。

サテ、此處まで書いて來るともう與へられた行數が盡きた。

初め、酒の讃を書けといふ手紙を見た時、我知らず私は苦笑した。なぜ苦笑したか。

要するに私など、自分の好むものにいつ知らず救はれ難く溺れてゐた觀がある。朝飯晝飯の膳にウヰスキーかビールを、夕飯の膳にはまた改めていはゆる晩酌を、といふ風に酒びたりになつてゐる者に果して眞實の酒の讃が書けるものだらうか。

いま一つ苦笑して苦笑の歌數首を書きつけこの稿を終る。

その一。

一杯を思ひきりかねし酒ゆゑにけふも朝より
醉ひ暮したり
なにものにか媚びてをらねばならぬ如き寂し
さ故に飲めるならじか
醉ひぬればさめゆく時の寂しさに追はれ追は
れて飲めるならじか

その二。これは五六年前、腎臟を病み醫者より絕對の禁酒を命ぜられた時の作。

酒やめてかはりに何か樂しめといふ醫者が面(つら)
に鼻あぐらかけり
彼しかもいのち惜しきかかしこみて酒をやめ
むと下思ふらしき
癖にこそ酒は飲むなれこの癖とやめむ易しと
妻宣らすなり
宣りたまふ御(み)言(こと)かしこしさもあれとやめむと
は思へ酒やめがたし
酒やめむそれはともあれ永き日のゆふぐれご
ろにならば何(な)とせむ
朝酒はやめむ晝酒せんもなしゆふがたばかり
少し飲ましめ
酒無しに喰ふべくもあらぬものとのみ思へり
し鯛を飯のさいに喰ふ
おろか者にたのしみ乏しとぼしかるそれの一
つを取り落したれ

うまきもの心に並べそれこれとくらべ廻せど
酒に如かめや
人の世にたのしみ多し然れども酒なしにして
なにのたのしみ

歌と宗教

私は宗教といふものを持たない。また、それを知らない。知るべき機會にまだ遭遇しないでゐるのである。

既成宗教に對する概念も極めて漠たるもので、寧ろ古いお寺とかお宮とか佛像とか、または昔の多くの殉教者たちの傳說などに親しみを感じてゐる位ゐのもので、全く宗教といふことに就いて云々する資格はないのである。

然し斯ういふ心持は或はその宗教といふものに通じてゐるのではあるまいかといふことを折々考へる事がある。それは「歌」に對する私の心情である。

歌に對する私の考へを極く簡單に言ふと、歌は自分を知りたいために詠むもの、守り育てたいために詠むもの、慰め樂しませ勵ますために詠むものと私は思つて居る。

自分の生れて來てゐること、生きて行かうとしてゐること等に氣のついてゐる人は餘り多くあるまい樣におもはれる。多くはたゞ其處に置かれてあるとだけにぼんやりと生きてゐるので、オヤ〳〵こ

れが自分か、これが眞實の自分かと自分の姿に對して眼を見張る人すらも少ない樣に思はれてならない。

　それに反して歌を求むる心のうちには多少とも確に自分自身といふものに氣づいてゐる心が動いてゐるのを感ずる。また、何か知ら自分の思つてゐることを言ひ現はしてみたいといふ心の下には必ずその「自分」といふものが動いてゐねばならぬ筈である。

　斯くして漸く自分といふものゝあるのを知る。さうして其處に見出でた唯一無二の自分といふものに對して次第に親しみを感じ始めるのはこれは自然である。親しみを感ずると共にその自分を一層濁りのないものに、美しいものに、深い大きいものに進めてゆきたい心の起るのもまた自然であるといはねばならぬ。

　一首々々と拙い歌を作り重ねて行きつゝあることは、要するにこの自分といふものをもつとよく知らう、もつとよくしようといふねがひから出てゐる樣に私には思はるゝのである。斯ういふ風に言つて來るといかにも概念的に理窟つぽく聞えるのを思ふが、實は無自覺ながらに自づとさういふ傾向をとつて來てゐる樣に思はれてならないのである。

　私の曾つて詠んだ一首に、

　　わがこころ澄みゆく時に詠む歌か詠みゆくほどに澄めるこころか

といふのがある。

　まつたく歌に詠み入つてゐる瞬間は、普通の信者たちが神佛の前に合掌禮拜してゐる時と同じな、或はそれより以上であらうと思ふ法悅を感じてゐるのである。

　おそらく私はこの歌の道を自分の信仰として一生進んでゆくであらうとおもふ。さうしていま自分の前に横たはつて居る歌の道はいよ〳〵靜かにいよ〳〵寂しく、そしていよ〳〵杳かに續いてゐるのを感ずるのである。

野蒜の花

その一

酒の話。

昨今私は毎晩三合づゝの晩酌をとつてゐるが、どうかするとそれで足りぬ時がある。さればとて獨りで五合をすごすとなると翌朝まで持ち越す。

此頃だん／＼獨酌を喜ぶ樣になつて、大勢と一緒に飲み度くない。つまり强ひられるがいやだからである。元來がいけるたちなので、强ひられゝばツイ手が出て一升なりその上なりの量を飲み納める事もその場では難事でない。たゞ、あとがいけない。此頃の宿醉の氣持のわるさはこの一二年前まで知らなかつたことである。それだけ身體に無理がきかなくなつたのだ。

對酌の時は獨酌の時より幾らか量の多いのを厭はない。つまり三合が四合になつても差支へない樣だ。獨酌五合で翌朝頭の痛むのが對酌だと先づそれなしに濟む。けれどその邊が頂點らしい。七合八合となるともういけない。

人の顏を見れば先づ酒のことをおもふのが私の久しい間の習慣になつてゐる。酒なしには何の話も出來ないといふ樣ないけない習慣がついてゐたのだ。やめよう／＼と思ふ事も久しいものであつたがどうやら此頃では實行可能の域にだけは入つた樣だ。何よりも對酌後の宿醉が恐いからである。

運動をして飲めば惡醉をせぬといふ信念のもとに、飲まうと思ふ日には自ら鍬を振り肥料を擔いで半日以上の大勞働に從事する創作社々友がいま私の近くに住んでゐる。この人はもと某專門學校の勅任教授をしてゐた中年の紳士であるが、さうして飲まれる量は僅かに一合を越えぬ樣である。その一合を飲むためにそれだけの骨を折ることは下戸黨から見ればいかにも御苦勞さまのことに見えるかも知れない。然し得難い樂しみの一つを得るがための努力であると見れば、これなども事實貴重な事業に相違ない。まつたく身體または心を働かせたあとに飲む酒はうまい。旅さきの旅籠屋などで飲むののうまいのも一に是に因るであらう。

旅で飲む酒はまつたくうまい。然し、私などはその旅さきでともすると大勢の人と會飲せねばならぬ場合が多い。各地で催さゝる歌會の前後などがそれである。酒ずきだといふことを知つてゐる各地方の人たちが、私の顏を見ると同時に、どうかして飲ましてやらう醉はせてやらうと手ぐすね引いて私の一顰一笑を見守つてゐる。從つて私もその人たちの折角の好意や好奇心を無にしまいため强ひて

もうまい顔をして飲むのであるが、事實は甚ださうでない場合が多いのだ。これは底をわると兩方とも極めて割の悪い話に當るのである。

どうか諸君、さうした場合に、私には自宅に於いて飲むと同量の三合の酒を先づ勸めて下さい。それで若し私がまだ欲しさうな顔でもしてゐたらもう一本添へて下さい。それきりにして下さい。さうすれば私も安心して味はひ安心して醉ふといふ態度に出ます。さうでないと今後私はさうした席上から遠ざかつてゆかねばならぬ事になるかも知れない。これは何とも寂しい事だ。

獻酬といふのが一番いけない。それも二三人どまりの席ならばまだしもだが、大勢一座の席で盃のやりとりといふのが始まると席は忽ちにして亂れて來る。酒の味どころではなくなつて來る。これも今後我等の仲間うちでは全廢したいものだ。

若山牧水といふと酒を聯想し、創作社といふと酒くらひの集りの樣に想はれてる、といふことを折々聞く。これは私にとつて何とも耳の痛い話である。私は正直酒が好きで、これなしには今のところ一日もよう過ごせぬのだから何と言はれても止むを得ないが、創作社全體にそれを被せるのは無理である。早い話が此頃東京で二三回引續いての會合があり、出席者はいつも五十人前後であつた。その中で眞實に酒好きでその味をよく知つてるといふのは先づ和田山蘭、越前翠村に私、それから他に某々青年一二名位ゐるのものである。菊池野菊、八木錠一、鈴木菱花の徒と來ると一滴も口にすることが

出來ないのだ。そしてその他の連中は唯だ浮れて飮んで騷ぐといふにすぎない。にや〳〵しながら嘗めてゐるのもある。酒徒としてはいづれも下の下の組である。一度も喧嘩をしないだけ先づ下の上位ゐるには踏んでやつてもいゝかも知れぬ。噂だけでも斯ういふ噂は香ばしくない。出來るだけ速くその消滅を計り度い。心から好きなら飮むもよろしい。何を苦しんでかこれを稽古することがあらう。一度習慣となるとなか〳〵止められない。そしてだらしのない、いやァな酒のみになつてしまふのだ。

全國社友大會の近づく際、特にこれらの言をなす所以である。

旅さきでのたべもの、話。

折角遠方から來たといふので、たいへんな御馳走になることがある、おほくこれは田舍での話であるが。

これもたゞ恐縮するにすぎぬ場合がおほい。酒のみは多く肴をとらぬものである。もつとも獨酌の場合には肴でもないと何がなしに淋しいといふこともあるが、誰か相手があつて呉れゝばおほくの場合それほど御馳走はほしくないものである。

念のために此處に私の好きなものを書いて見ると、土地の名物は別として、先づとろゝ汁である。これはちひさい時から好きであつた。それから川魚のとれる處ならば川魚がたべたい。鮎、いはな、

やまめなどあらばこの上なし。鮒、鯰、鯉、うぐひ、鰻、何でも結構である。一體に私は海のものより川の魚が好きだ。但しこれは海のものよりたべる機會が少ないからかも知れない。

それから蕎麥、夏ならばそうめん。芋大根の類、寒い時なら湯豆腐。香のものもうまいものだ。土地々々の風味の出てゐるのはこの香の物が一番の樣に思ふがどうだらう。

田舍に生れ、貧乏で育つて來た故、餘り眼ざましい御馳走を竝べられると膽が冷えて、食慾を失ふおそれがある。まことに勿體ない。ないがしろにされるのは無論いやだが、徒らに氣の毒なおもひをさせられるのも心苦しい。

飯の時には炊きたてのに、なま卵があれば結構である、それに朝ならば味噌汁。

その二

女人の歌。

『どうも女流の歌をば多く採りすぎていかん、もう少し削らうか。』

と私が言へば、そばにゐた人のいふ。

『およしなさいよ、女の人のさかりは短いんだから。』

いやさかと萬歲。

『十分ばかりお話がしたいが、いま、おひまだらうか。』

といふ使が隣家から來た。

ちやうど緣側に出て子供と遊んでゐたので、

『いゝや、ひまです。』

とそのまゝ私の方から隣家へ出かけて行つた、隣家とは後備陸軍少將渡邊翁の邸の事である。土地の名望家として聞え、沼津ではたゞ「閣下」とだけで通つてゐる。私を訪ぬるために沼津驛で下車した人が若し驛前の俥に乘るならば、

「閣下の隣まで」

と言へば恐らく默つて私の家まで引いて來るであらう。首から上に六箇所の傷痕を持つ老將軍である。

翁の私に話したいといふ事は「いやさか」と「萬歲」とに就いてゞあつた。日本で何か事のある時大勢して唱和する祝ひの聲はおほよそ「萬歲」に限られてゐる。第一これは外國語であり、而かもその外國語にしても漢音吳音の差により一は「バンザイ」と發音さるべく、一は「マンザイ」と發音されねばならぬのにかゝはらず、現在の「バンザイ」ではどちらつかずの鵺語となつてゐる。ことにそ

の語音が尻すぼまりになつて、つまり「バンザイ」の「イ」が閉口音になつてゐるために、陰の氣を帶びてゐる。めでたき席に於て祝福の意味を以て唱和さるべき種類のものとしてはどの點から考へても不適當であるといふのである。

それも他に恰好な言葉が無いのならば止むを得ないが、わが國固有の言葉として斯る場合に最もふさはしい一語がある。即ち「いやさか」である。「彌榮え」の意である。これは最初を「イ」と口を緊めておいて、やがて徐ろに明るく大きく「ヤサ、カァ」と開き上げて行く。

どうかして「萬歳」の代りにこの「いやさか」を擴め度い。聞けば君は世にひろく事をなしてゐる人ださうだから、君の手によつてもこれを行つて貰ひ度い、それをいま頼みに行かうと思つてゐたのだ、と翁は語られた。

これは筧克彦博士が初めて發議せられたものであつたとおもふ。翁もさう言はれた。そして翁は多年機會あるごとにこの實地宣傳を試みられつゝあるのださうだ。

何かで筧博士のこの說を見た時、私は面白いと思つたのであつた。端なくまた斯ういふところで思ひがけない人からこの話を聞いて、再び面白いと思つた。然し、一方は口馴れてゐるせゐか容易に呼び擧げられるが、頭で考へる「い、や、さ、か」の發音は何となく角ばつてゐて呼びにくいおもひがした。その事を翁に言ふと、翁は言下に姿勢を正して、おもひのほかの大きな聲で、その實際を示された。

思はず額を上ぐるほどの、實に氣持のいゝものであつた。

「いッ」と先づ脣と咽喉と下腹とを緊め固めて、一種氣合をかける心持で、そして徐ろに次に及び、最後の「かァ」で再び腹に力を入れて高々と叫び上げるのださうである。

私は悉く贊成して、そして出來るだけの宣傳に努める事を約して歸つて來た。社友にも同感の人が少くないと思ふ。若し一人々々の力の及ぶ範圍に於てこれを實地に行つて頂けば幸である。全國社友大會の適宜な場合に渡邊翁に音頭をとつていたゞいて先づその最初を試み度く思ふ。

梅咲くころ。

今年は梅がたいへんに遲かつた。

　きさらぎは梅咲くころは年ごとにわれのここ
　ろのさびしかる月

私はちらりほらりと梅の綻びそめるころになると每年何とも言へない寂しい氣持になつて來るのが癖だ。それと共に氣持も落着く。

　好かざりし梅の白きを好きそめぬわが二十五
　の春のさびしさ

この一首が恐らく私にとつて梅の歌の出來た最初であつたらう。房州の布良に行つてゐた時の詠である。

年ごとにする驚きよさびしさよ梅の初花をけふ見つけたり

うめ咲けばわがきその日もけふの日もなべてさびしく見えわたるかな

これらは『砂丘』に載つてゐるので、私の三十歳ころのものである。

うめの花はつはつ咲けるきさらぎはものぞおちゐぬわれのこころに

梅の花さかり久しみ下褪せつ雪降りつまばかなしかるらむ

梅の花褪するいたみて白雪の降れよと待つに雨降りにけり

うめの花あせつつさきて如月(きさらぎ)はゆめのごとくになか過ぎにけり

これらはその次の集『朝の歌』に出てゐる。

梅の木のつぼみそめたる庭の隈に出でて立てればさびしさ覺ゆ

梅のはな枝にしらじら咲きそめてつめたき春となりにけるかな

うめの花紙屑めきて枝に見ゆわれのこころのこのごろに似て

褪せ褪せてなほ散りやらぬ白梅のはなもこのごろうとまれなくに

その次『白梅集』には斯うした風にこの花を歌つたものがなほ多い。昨年はことに梅を詠んだものが多かつた。ほめ讃へたものもあつたが、矢張り淋しみ仰いだものが多かつた。

春はやく咲き出でし花のしらうめの褪せゆく頃ぞわびしかりける

花のうちにさかり久しといふうめのさけるす

がたのあはれなるかも

ところが今年はまだ一首もこの花の歌を作らない。もう二月も末、恐らくこの儘に過ぎてしまふ事であらう。朝夕の惶しさがこの靜かな花に向ふ事を許さぬのである。

その三

『山櫻の歌』が出た。私にとつて第十四册目の歌集に當る。

此處にその十四册の名を出版した順序によつて擧げて見よう。

海の聲	（明治四十一年七月）	生命社
獨り歌へる	（同　四十三年一月）	八少女會
別離	（同　年四月）	東雲堂
路上	（同　四十四年九月）	博信堂
死か藝術か	（大正　元年九月）	東雲堂
みなかみ	（同　二年九月）	籾山書店
秋風の歌	（同　三年四月）	新聲社
砂丘	（同　四年十月）	博信堂
朝の歌	（同　五年六月）	天弦堂
白梅集	（同　六年八月）	抒情詩社
寂しき樹木	（同　七年七月）	南光書院
溪谷集	（同　七年五月）	東雲堂
くろ土	（同　十年三月）	新潮社
山櫻の歌	（同　十二年五月）	新潮社

となるわけである。この間に『秋風の歌』まで七歌集の中から千首ほどを自選して一册に輯めたがあつたが間もなく絶版になり、同じく最初より第九集『朝の歌』までから千首を拔いた

行人行歌	（大正四年四月）	植竹書院
若山牧水集	（大正五年十一月）	新潮社

との二册がある。

處女歌集『海の聲』出版當時のいきさつをばツイ二三ケ月前の『短歌雜誌』に書いておいたから此處には略（はぶ）くが、思ひがけない人が突然に現はれて來てその人に同書の出版を勸められ、中途でその人がまた突如として居なくなつたゝめ自然自費出版の形になり、金に苦しみながら辛うじて世に出した

ものであつた。私が早稻田大學を卒業する間際の事であつた。

『獨り歌へる』は當時名古屋の熱田から『八少女』といふ歌の雜誌を出して中央地方を兼ね相當に幅を利かしてゐた一團の人たちがあつた。今は大方四散して歌をもやめてしまつた樣だが、鷲野飛燕、同和歌子夫妻などはその頃から重だつた人であつた。その八少女會から出版する事になり、豫約の形でたしか二百部だけを印刷したものであつた。形を菊版にしたのが珍しかつた。

程なく私は當時東雲堂の若主人西村小徑（いまの陽吉）君と一緒に雜誌『創作』を發行することになり、その創刊號と相前後して『別離』を同君方から出すことになつた。意外にこれがよく賣れたので、その前の二冊はほんの內緒でやつた形があり、かたぐ〜で世間ではこの『別離』を私の處女歌集だと思ふ樣な事になつた。また、內容も前二冊の殆んど全部を收容したものであつた。これの再版か三版かが出た時に金拾五圓也を貰つて私は甲州の下部溫泉といふに出向いた事を覺えて居る。歌集で金を得たこれが最初である。

『創作』の毎月の編輯に間もなく私は飽いて來た。そしていはゆる放浪の旅が戀しく、三四年間で日本全國を廻るつもりで先づ甲州に入り、次いで信州に廻つた。かれこれ半年もそんなことをしてゐるうちにまた東京が戀しくなつて歸つて來て出版したのが『路上』である。これは當時小石川の竹早町に主として古本を買つてゐた博信堂といふ店の主人が或る紙屑屋から古人尾崎紅葉の未發表の原稿を手に入れたといふのでそれで大いに當てる積りで急に出版を始め、案外にも失敗して困つてゐた頃太田水穗さんの紹介でその店から出すことになつたのであつた。これには珍しく油繪の口繪が入つてゐる。私の歌集に肖像寫眞以外斯うした口繪の入つてゐるのはこの一冊だけである。この口繪に就いて思ひ出す。出版する少し前に山本鼎君と一緒に數日間下總の市川に遊びに行つてゐた。或日同君が江戸川べりの榛の若芽を寫生すると云つて畫布を持ち出したのについて行き、その描かれるのを見てゐるうちに私は草原に眠つてしまつた。それを見た同君は急に榛の木をやめて眠つてゐる私を寫生してしまつた。サテ東京へ引上げようとなつて宿屋の拂ひが足りず、その繪を其處に置いて歸つた。それを博信堂の主人と共に幾らかの金を持つて出懸けて受取つて來て三色版にしたのであつた。原畫は私が持つてゐたのだが、富田碎花君がいつしか持ち出し、それをまたその愛人だかゞ持ち出し、思ひがけない何處か長崎あたりへ行つてゐるといふ話をあとで聞いた。

『死か藝術か』に就いても思ひ出がある。喜志子と初めて同棲して新宿の遊女屋の間の或る酒屋の二階を借りてひつそりと住んでゐた。その頃彼女は遊女たちの着物などを縫つて暮してゐたのでそんな所に住む必要があつたのだ。一緒になつて幾月もたゝぬところに私の鄕里から父危篤の電報が來た。其處で周章(うろた)へて歌を纒めて東雲堂へ持ち込み、若干の旅費を作つて歸國したのであつた。で、この本の校正をば遠く日向の尾鈴山の麓でやつたのであつた。最初の校正刷を郵便屋の持つて來た時、私は

庭の隅の据風呂に入つてゐて受取つた。そして濡れた手で封を切つてそれを見ながら、何となしに涙を落したことを覺えて居る。

郷里には一年ほどゐた。一時よくなつた父がまた急にわるくなつて永眠したあと、いつそ郷里で小學校の教師か村役場にでも出て暮らさうかなどとも考へたのであつたが、矢張りさうもならず、五月ごろであつた、非常に重い心を抱いてまた上京の途についた。そしてその途中、前から手紙などを貰つてゐた伊豫岩城島の三浦敏夫君を訪ふことにした。先づ伊豫の今治に渡り、それから瀬戸内海の中の一つの小さな島に在る同君宅を訪ねて行つた。勸めらるゝまゝに同家の別莊風になつた一軒に暫く滯在してゐた。海の上に突き出しになつた樣な部屋は實に明るくて靜かであつた。フツと私は其處で郷里に歸つてゐた間に詠んだ歌を一册に纒めて見たいと思ひついた。そして荷物を解いてノートを取り出し一首々々清書し始めたのであつたが、それは私にとつて意外にも苦しい事業である事を知つた。郷里の一年間は異樣に緊張した感傷的な、また思索的な時間を私に送らせたのであつた。だから詠んだ歌にしろ、いつか平常の埒を放れて一首が四十四五文字もある樣なものになつたり、雅語から離れて口語になつたり、今までにない變體なものばかりが出來てゐた。それを、その郷里から離れてそんな一つの島の岸の靜かな所で見直し始めたので、周圍の環境が急變したゝめに、己れ自身自分の心の姿に驚いたのであつた。一首を寫し二首を清書してゐるうちに、全く息のつまる樣な苦しさを覺えて

來た。後には飯が食へなくなつた。それを見て三浦君がひどく心配し、では私が清書しませうと云つて、大半彼が代つて寫しとつて呉れたのであつた。それを持つて上京して、當時『ホトトギス』を發行してゐた籾山書店に賴んで出版したのが『みなかみ』であつた。この歌集は私のもの、中でも最も紀念すべきものである樣に思はるゝ。その前の『死か藝術か』あたりから多少づゝ變りかけてゐた私の詠歌態度が、この集に於て實に異樣に緊張して變つて來てゐるのである。『みなかみ』が出ると世間で例の破調問題が八釜敷くなり、短唱だの何だのといふものが行はるゝ樣になつた。

『みなかみ』の次に出したのが『秋風の歌』であつた。

『みなかみ』を瀬戸内海の島で編輯してゐた時のことで書き落した一事がある。餘りに急變した自分自身の歌の姿に驚いた私は、一首を書いてはやめ、二首を清書しては考へ込み、一向に寫事の捗らぬその間にまた行李を解いて萬葉集を取り出してぼつ〳〵と讀み始めた。心を靜めたいためと、ひとつは古來の歌の姿をさうした場合にとつくりと眺め直して見度いためであつた。そしてこの事は一層私に歌集清書の筆を鈍らしたのであつた。

とかくして出來上つた『みなかみ』の原稿を持つて上京した私は、程なく小石川の大塚窪町に家を借り、一時信州の里へ歸してあつた妻子（その間に長男が生れてゐた）を呼んで、初めて家庭らしい家庭を構ふることになつた。そして其處に永い間の獨身時代の自由や放縱やまたは最近一二年間の歸

省時代の妙に緊張してゐた生活と異つた朝夕が始まつた。鎭靜があり、疲勞があつた。さうした一年間のあひだに詠まれたものが『秋風の歌』である。これには『みなかみ』の奔放緊張は急に影を消して、いかにも懶い寂寥が代つて現れて居る。この本は友人郡山幸男君の經營してゐた新聲社といふのから出したのであつたが、程なく閉店したゝめ、同君の手により他の何とかいふ本屋の手にその紙型は渡つて今でも其處から出版されてゐるさうである。散文集『牧水歌話』も亦た同樣であつた。

『秋風の歌』で見るべきは、最初『海の聲』あたりから『路上』に及ぶまで殆んど感傷一方で詠んで來たものが『死か藝術か』に及んで（その名の示すが如く）多少の思索味を加へて來、『みなかみ』で一層その熱を加へてやがて本書に及んでゐるのであるが、これには熱叫するといふ樣なところがなく、たゞ在るがままの自分を見詰めて歌つてゐるといふ形に表れてゐる事などであらう。

大塚窪町に住んでゐる間に妻が病氣になつた。轉地を要するといふので相模の三浦半島に移り住んだ。大正三年の二月末であつた。そして其處で詠んだものを輯めたのが『砂丘』である。これにはいかにも物蔭に隱れて勞れを休めてゐるといふ樣な、か弱い感傷から詠まれたものが大部分を占めて居る。春の末から夏にかけての景象を歌つたものが多く、いはゞ「夏の疲勞」とも謂ふべき歌集であつた。前に『路上』を出した博信堂主人が一度悉く失敗した後、琴の音譜の本を出して大いに當て日本橋の方に引越して開業してゐる店から出版したのであつた。今でもその當時の樣にこの店が繁昌して

ゐるかどうか其後一向に消息をしらない。

次が『朝の歌』である。『砂丘』と同じく三浦半島北下浦の漁村で詠んだ歌が大半を占め、東北地方の旅行さきで出來たものが加はつてゐる。同じ三浦半島で詠んだものではあるが、前の『砂丘』とは歌の性質がすつかり變つてゐる。前と違つて歌に生氣がある。しかも『みなかみ』の樣に神經質のそれでなく、おほどかな靜かな力を持つた生き〳〵しさであると思つて居る。この歌集あたりから私の詠風といふ樣なものがほゞ一定して來たのではないかと考へらるゝ所がある。最近の著『くろ土』『山櫻の歌』はまさしくこの『朝の歌』直系の詠みぶりであると見ることが出來るのである。さういふ所から前の『みなかみ』とはまた異つた意味で私には忘れ難い一册である。これは神樂坂に天弦堂といふを開いてゐた中村一六君の書店から出したのであつたが、これも程なく閉店し、紙型は他へ轉賣せられてしまつた。同じ店から出した散文集『和歌講話』また然りである。

いつまでもその漁村に引込んでゐるわけにゆかず、大正五年の夏から私だけ上京して本郷の下宿に住んで原稿などを書いてゐた。その間に出來た歌を輯めたのが『白梅集』である。これはまた歌の姿が『朝の歌』とは急に變つてゐるのが不思議なほどだ。ひどく神經衰弱的で、そしてすべてが絕望的な主觀で滿ちてゐる。謂はゞ『みなかみ』をきたなくした樣なもので、それだけまた銳くなつたとはいへるであらう。

これは妻の歌との合著になり、内藤鋠策君の抒情詩社から出したものであつた。當時妻も恢復して上京し、小石川の金富町に住んでゐた。

『寂しき樹木』はその次、巣鴨の天神山に移つた頃、出したものであつた。これはよく『砂丘』の詠みぶりに似通つたもので、即ち夏の輝やかしさとその光の中に疲れて居る自分の心とを詠んだ歌が一冊の基調をなしてゐる。細いけれど、何處にか光を含んだものとしてこの本を振返ることが出來る。これは本鄕邊の印刷所に勤めてゐた青年が（その以前籾山書店にゐた關係から歌集出版などに眼をつけてゐたと言つてゐた）突然訪ねて來て叢書の中の一編として出したいからと云つて急に原稿を纏めさせられたものであつた。彼はひどく病身で、それに初めての事ではあり、事ごとにまごついて原稿を渡してから出版まで隨分な時間がかかり、ためにその半年ほど後に東雲堂から同じく歌集叢書の一編として出す事になつた『溪谷集』の方が先に町に出てしまつたのであつた。しかも彼はこの一册を（その前に吉井勇君の『毒うつぎ』といふのがあつた）出すと直ぐ死んでしまつた。そしてこの本もそれなりになつてしまつた。印税の約束で出版した『秋風の歌』『砂丘』『朝の歌』『寂しき樹木』、それに散文集二册、すべて初版を出すか出さぬに本屋の都合でその版權が行衛不明になつてしまふなど、よくよくの貧乏性に生れて來たものと苦笑せざるを得ない。

その『寂しき樹木』と前後して出たものに『溪谷集』がある。『朝の歌』と比べれば歌の柄の大きさに於て劣り、清澄さに於て——狹く迫つてゐることに於いて優つて居るであらう。これは主として二つの連作から成つてゐると見ていゝ。即ち一つは秋の秩父の溪谷を巡り歩いて詠んだものと、一つは

伊豆の土肥溫泉に滯在してその海濱の早春を詠んだものとである。

其處で自分の歌集の出版が一寸途切れて居る。それまでは必ず一年に一册、どうかすると二册づゝも出して來てゐたのであるが、『溪谷集』を出してからまる三年の間何物をも出してゐない。そして大正十年三月に出したのが『くろ土』であり、二年おいて同十二年五月出版のものが即ち最近の『山櫻の歌』となるのである。この二冊に就いては多く諸君の知悉せらるる所だらうと思ふので筆を略く。

貧乏首尾無し

貧しとし時にはなげく時としてその貧しさを
忘れてもをる

ゆく水のとまらぬこころ持つといへどをりを
り濁る貧しさゆゑに

小生の貧困時代は首尾を持つてゐない。だからいつからいつまでとそれを定める由もない。そんな狀態であるために殆んどまたそれに對する感覺といふものをも失つて居る觀がある。從つてオイソレとその記憶を持ち出して來ることが困難である。止むなくこれを細君にたづね相談して見た。流石に彼女にはあの時はあゝであつた。あそこでは斯うであつたといふ相當に生々しい感傷がある樣である。然しそれとても尋ねられたから思ひ出した程度のもので、要するに亭主同樣この永續的貧乏に對しては極めてノン氣であるらしい。

早稻田の學校を出たのはたしか二十四歲であつた。學校にゐる間も後半期は鄕里からの送金途絕えがちであつたので半分自ら稼いで過してゐた。學校を出ると程なく京橋區の或る新聞社に勤めた。月給は二十五圓であつた。社命で止むなく大嫌ひの洋服を月賦で作つたが、ネクタイを買ふ錢がなく、それ拔きで着て出てゐたところ——さうだ、靴をば永代靜雄君のを借りて穿いたのだつた——社の古老田村江東氏が見兼ねて自分のお古を持つて來て結んで吳れた。居ること約半年、社內に動搖があつて七人ほど打ち揃うて其處を出た。そしてまた間もなく同區內の他の新聞社に出ることになつた。ところが前のと違つてどうもその社內の空氣が面白くなく、前社同樣二十五圓の月給をば二箇月分か貰つたが出社して事務をとつたのは僅々五六日であつた。

それから暫く浪人してゐてやがて短歌中心の文藝雜誌『創作』を京橋の東雲堂から發刊する事になつた。編輯を續けること四五ヶ月、漸く雜誌の基礎も定まる樣になると月並で煩雜なその仕事がイヤになり、それをば他の友人に讓つておいて所謂「放浪の旅」に出た。三四年間の豫定で、各地の歌人を訪ねながら日本全國を廻つて來ようといふのであつた。

先づ甲州に入り、次いで信州に廻つたところ、運わるく小諸町で病氣に罹つた。そして其處の或るお醫者の二階に二ヶ月ほども厄介になつてゐた。出立早々病氣に罹つた事が、いかにも出鼻を挫かれた氣持で、折角企てた永旅もまたイヤになつて東京へ引返して來、當時月島の端に長屋住居をしてゐ

た佐藤緑葉君の家に身を寄せた。初冬の寒い頃であつた。或日彼の細君から「若山さん、二圓あるとお羽織が出來ますがねエ」と言つて嘆かれた事を不圖いま思ひ出した。その前後であつたのだらう、北原白秋君の古羽織を借りたが借り流しにしたかの事も續いて思ひ出されて來た。

それから再び『創作』の編輯をやることになり、飯田河岸の、砲兵工廠の眞向ひに當る三階建の古印刷所の三階の一室を間借して住む事になつた。あのどろ〳〵に濁つた古濠の上に傾斜した古家屋の三階のことゝて、二三人も集つて坐りつ立ちつすればゆらつくといふ實に危險千萬なものであつたが――實際小生が其處を立退くと直ぐその家は壞されてしまつた――その時はさうした變なところが妙に自分の氣持に合つてゐたのだ。その前後が最も小生の酒に淫してゐた頃で、金十錢あれば十錢、五錢あれば五錢を酒に代へ飲んでゐた。イヤ、それだけでなく帽子が酒になり、帶までもそれに變つた。さうしてその頃小生の詠んでゐた歌は次の樣なものである。

正宗の一合壜のかはゆさは珠にかも似む飲まで居るべし

わが部屋にわれの居ること木の枝に魚の棲むよりうらさびしけれ

誰にもあれ人見まほしき心ならむ今日もふら

ふら街出であるく

其處此處の友は今しも何をして何想ふならむわれ早やも寢む

わだつみの底に青石搖るるよりさびしからずやわれの寢覺は

明けがたの床に寢ざめてわれと身の呼吸(いき)することのいかにさびしき

寢ざむればうすく眼に見ゆわがいのちの終らむとする際の明るさ

夜深く濠に流るる落し水聞くことなかれ寢ざむるなかれ

かなしくも命の暗さきはまらばみづから死なむ砒素をわが持つ

青海のひびくに似たるなつかしさわが眼の前の砒素にあつまる

あゝした落ちつかぬ朝夕を送つてゐながら斯ういふ小綺麗な歌ばかりを詠んでゐたといふことが今から見るといかにも滑稽の感を誘ふのである。

サテ、斯うして順々に書いてゐたのでは結局一種の自叙傳を書くことになつてゆく。間を端折つて結婚後の事を少し書き添へておきたい。すべて貧乏史の續きならぬはないが、多少その間に色彩の變化がある樣であるからである。

我等が結婚したのは小生の二十八歳の時であつた。當時彼女は新宿の女郎屋の間に在る酒屋の二階を借りて、其處で遊女たちの着物を縫つて身を立て、ゐたので取りあへず其處に同棲する事になつた。謂はゞ亭主が女房の許に寄食した形であつた。小生は小生でその頃休刊してゐた以前からの雜誌『創作』を自分の手で復活經營したく頻りと金を集めることに腐心してゐたのであつた。折も折、其處へ小生の郷里から父危篤の電報が來て九州の日向まで歸らねばならぬことになつた。病氣は中風で次第に永引き、終には其儘眠つてしまつた。かた〴〵で約一年ばかりも郷里に留り、大正二年六月上京して小石川の大塚窪町にさゝやかな一戸を構へた。その時はもう長男が生れてゐた。

其處で或る金主がついていよ〳〵其の雜誌を再興する事になつた。なるにはなつたが、なか〳〵思ふ樣に成績が擧らず、小生の受くる報酬なども一向に定つてゐなかつた。それに妙に小生の家には來

客が多かつた。毎日五人か十人、而も一向にこちらの事にはお察しのつかぬ人たちだつた。小生自身もまた前の頽廢期間の惰力から逃れ得ずに相手さへあれば二日でも三日でも酒に浸つて醒めなかつた。從つて雜誌の方の仕事も進まず金主との間も面白くない、間に在つて唯だもう困るのは細君ばかりであつた。初めに言つた彼女の記憶といふのは槪ねこの大塚窪町時代に係つてゐるのも無理ならぬ話である。幸にツイ近所に同じ樣に貧しい友人が住んでゐた。中の一人の若い畫工などは一圓でも二圓でも金が手に入れば必ず先づその一割を以て鹽を買ひ、五分を以て胡麻を買ひ、殘り八割五分の金で米を買つて置く。米と胡麻鹽とさへあれば人間決して死なゝいといふのがこの人の言分であつた。そしてさう言ひながら我等の間には明朝の米今夜の米の貸借が行はれてゐたのである。斯うした貧しい同志が相隣つて住んでゐた事はお互ひにとつて少なからぬ力であらねばならなかつた。

細君はたうとう病氣になつた。つてを求めて雜司ヶ谷に在る或る慈善病院に入れたが次第に永引きやがて醫師のすゝめで相州三浦半島に轉地した。その頃流石に小生自身も疲れてゐたのでいつそ一緒に行くがよからうと一家して移つて行つた。此處に來ると細君は非常に安らかな氣持になつたらしい。代つて苦しんだは小生である。轉地と共に雜誌も休刊したので、一定の收入といふものから全然離れてしまつた。せつせと書く原稿料とても知れたもので、歌の選料亦た然りであつた。歌人仲間が短册會を起して金を拵へ、細君の藥代として送つてよこして呉れたもその時であつた。が、此處でも

また一人貧しい友達が出來た。これは寧ろ我等のあとを追つて移つて來た樣な人たちで、同じく親子三人連で、そして同じく細君は病んでゐた。

この夫婦の貧乏は我等よりもつとひどかつた。「オイ、これをこれだけ借りてゆくよ」と言つて主人公自身、我等の借りてる部屋の隅の炭箱から木炭を一摑み抱へて行つた姿など、今でもまだ眼の前にある心地がする。

三浦を引上げたは大正五年の暮であつた。

そしてその後をなほ語るとすればそれは寧ろ日常生活の貧乏といふより雜誌發行者としての貧窮談になる。卽ち多く印刷工場を相手としての苦鬪史である。休刊してゐた『創作』をその年から自分自身の手でまた〱再興して今日まで續けて來てゐる道中の話となるのである。

然し、どうしたものか小生には實のところ貧乏といふものがさほどには苦にならない。よく〱の貧乏性に生れて來てゐるのか、その時〱ですぐ忘れてしまひ得る幸福な性質を持つてゐるのか、その場はとにかく、その前後などを考ふることに於て、さほどには苦にならない。もう歳も歳だし、子供も大きくなつたし、それに三界無宿の身で、今少し何とか考へねばならぬのだが、考へるつもりではゐるのだが、どうもまだ身にしみて來ない。おしまひまでこれで押してゆくのかも知れない。

雲の峰

白雲、岫（しう）を出づ、といふ言葉がある。好きな言葉だ。靜かで、しかも生きた心の動いてゐるのを思ふ。

あながち山の岫（くき）ならずとも、いはゆる天（あめ）の眞洞（まほら）の大ぞらに、むつくりと浮いて出る初夏のころの雲の姿は、みづ〱しく、また輝やかしいものである。むくりむくりと幾重にか湧き重なつて、その根がたに僅かに黝みを宿し、圓みを帶びてうち廣がつたあたりはそれこそ朝露の持つ樣なみづ〱しい光を帶びて居る。

然し、雲の峰といふ言葉の持つ本來の意味は瑞々しいこのはつ夏の雲の姿でなく、夏の眞盛りに大空高く樓閣を築いた樣に、のしかゝつて現はれる雲のことを言ふのであらうとおもふ。

いつたいに夏の景物はみな力に滿ち溢れた樣な、強い烈しい姿をしてゐて、そのなかに案外に深い寂しさあはれさを含んでゐる樣に私は思ふ。

螢のとぶみじか夜のあはれさ、郭公の啼く明けがたのあはれさ、蟬の鳴き入つた眞晝のさびしさ、ひぐらしの鳴くゆふぐれのさびしさ、これは春にも秋にも冬にもない味はひのものである。無論春にも秋にもそれに似通つたものがあるにはあるが、夏のが一番眼だたないでしかもしみぐ\と身にしみる樣に思はれる。春や秋のそれらは、あまりに形に見えすぎて却つて底の淺いのをおもふ。

雲の峰もまたこの夏のあはれさを宿したもの、一つであらう。

ものものしく空には浮ぶが、しかも多くはほんの暫くで消えてしまふ。欝然として聳えたなかに、早や泡沫（うたかた）の弱さはかなさを何處ともなくその形に示して居る。眩ゆい位ゐに光り輝きながらそれは決して朝日子の含む光ではない。

土用なかばに秋風ぞ吹く、といふ言葉がある。夏のさかりの、暑いさかり、眩ゆい極みとおもつてゐるなかに早や何處となく秋めいたそよ風のおとづれて來てゐる微妙さを言つた言葉であらうが、雲の峰に現はれるは最もこの頃に多いのだ。

沖邊はるかに聳ゆるものより、幾重か連なつた山の上に立つた雲の峰に却つてうるほひ深いのを覺え、大市街の上にのしかかつて立ち現はる、ものに最も深い陰影とはかなさとを見る樣だ。

廿三夜

さほどに暑い夜でもなかつたであらうが、眠りそこねてまじ〳〵してゐる身にとつては、思へば思ふだけ暑苦しく思へて來た。

眠られぬ夜には私はウヰスキィを飲むのを常としてゐた。その夜も初めからそれを思はないではなかつたが、折悪しく腸をこはしてゐたゝめに、いつもの樣に躊躇なく起き上つてその壜を取出す氣になれなかつた。然し、數知れぬ寢返りの後には矢張り蚊帳をくゞつてそとへ出るほかはなかつた。そして盗みをする樣にして戸棚からそれを取出すと、手近の長火鉢の側に坐つて栓をとつた。眞上の柱時計は間もなく二時を打たうとしてゐた。

時ならぬ肌の匂ひと酒の匂ひとに驚いた樣に蚊が群がつて來た。蚊帳に持ち込むはむさくろしいし、不圖私は思ひついて壜とコップとを持ちながらひそかに庭に出て行つた。

櫻や松の四五本の木立の蔭には涼み臺が置いてあつた。その上にあがつて坐りながら我知らず私は微笑した。忽ち程よい微風が感ぜられ、星とても見えぬ空には夏の夜らしいほの光があつて少しさしかざして酌ぐ分には別にウキスキイをこぼすほどの事もなかつた。却つて眼や心の冴えて來るのを覺えながら、思ひがけぬ拾ひものをした氣持で二杯三杯と小さなコップを重ねて行つた。

漸く眠りの覺めてゆく樣なぼんやりした心の裡にいつとなく來て宿つた一つの考へ事があつた。晝間に讀んだ雜誌に載せられてゐた有島武郎といふ人の情死記事に就いてゞあつた。

私はこの人を個人としては少しも知らず、作者としても殆んど知る所がなかつた。この情死事件があつて後、種々なものに書かれた記事によつて初めてその人物の幻影を知り得たと云つてもよい位ゐのものであつた。ことにその日に讀んだ「泉」といふ雜誌に故人の親友たちによつて書かれた同氏追悼の言葉を讀むとこの未知の人の面目がやゝはつきりと解つて來た樣な氣がしてゐたのであつた。

聰明で、富有平和の家に生れたにしては苦勞性で、人事社會に對しての充分の考察をも持つてゐたげに見ゆる人が、何故あゝした不合理不自然な出來事の中に突如として身を沈めて行つたか。思ひ殘す所なくその中に亡び得るとわざ〳〵揚言したその戀といふものも果して眞實であつたかどうか。

蛇の好きなといふその女に、周圍の友人達から一生懸命に彼を奪ひ取つて行つたとも見ゆるその女に、いゝ芝居相手とされて死んで行つたのではなかつたか。また、その女の亭主といふ男の今度の事件に對する態度はどうだ。自分の女房を寢取られた恨みから一途になつて罵り下した言葉としては一萬圓賣買云々も或は無理ではないかも知れぬと一時同情もせられたのであつたが、その女の死後四十

九日たつかた、ぬにまた新しい美人を貰ひ受けるとはどうしたことだ。事件に對するつらあてか、それともまた今度は此奴は幾らに賣れると先づその評價からきめて貰ひ受けたのではなかつたか。それともそれ等新聞雜誌の記事をどの邊まで信じてい丶ものか。

『オ丶！』

私は獨りでコップをさしあげた。楕圓形とも見ゆる怪しげな月が、濕氣深い空にいま眞向ひの香貫山の峰を離れる所であつた。

『廿三夜か六夜かナ』

さう思ふと、山深い故鄕で母と共にこの月を待つた幼い自分の影が心に浮んだ。

地震日記

伊豆半島西海岸、古宇村、宿屋大谷屋の二階のことである。九月一日、正午。

その日の晝食はいつもより少し早かつた。數日前支那旅行の歸りがけにわざ〳〵其處まで訪ねて來て呉れた地崎喜太郎君が上海からの土產物の極上ウヰスキィを二三杯食前に飮んだのがきいて、まだ膳も下げぬ室內に仰臥してうと〳〵と眠りかけてゐた。

其處へぐら〳〵ッと來たのであつた。

生來の地震嫌ひではあるが、何しろ半分眠つてゐたのではあるし、普通ありふれたもの位ゐにしか考へずに、初めは起上る事もしなかつた。ところが不圖見ると廊下の角に當る柱が眼に見えて斜めになり、且つそれから直角に渡された双方の橫木がぐつと開いてゐるのに氣がついた。

とおもふと私は橫つ飛びに階子段の方へ飛び起きた。同時に階下の納戶の方で內儀の

『二階の旦那！』

と叫ぶ金切聲が耳に入つた。が、その時にはその人より私の方がよつぽど速く前の庭にとび出して

ゐた。

するとゴウッ、といふ異樣な音響が四方の空に鳴り渡るのを聞いた。見れば目の前の小さな入江向うの崎の鼻が赤黒い土煙を擧げて海の中へ崩れ落つるところであつた。オヤオヤと見詰めてゐるとツィ眼下の、宿から隣家の醫師宅にかけて庭の塀下を通つてゐる道路が大きな龜裂を見せ、見る／＼石垣が裂けて波の中へ壞れて行つた。

これは異常な地震である、と漸く意識をとり返してゐるところへ、また次の震動が來た。地響とか山鳴とかいふべき氣味の悪いどよみが再び空の何處からか起つて來た。村人の擧ぐる叫びがそれに續いてその小さな入江の山蔭からわめき起つた。

三度、四度と震動が續いた。そのうち隣家醫師宅の石塀の倒れ落つる音がした。それこれを見てゐるうちに先づ私の心を襲うたものはツィ眼下から押し廣まつて行つてゐる海であつた。海嘯であつた。

不思議にも波はぴたりと凪いでゐた。その日は朝からの風で、道路下の石垣に寄する小波の音が斷えずぴたり／＼と聞えてゐたのだが、耳を立てゝもしいんとしてゐる。そして海面一帶がかすかに泡だつた樣に見えて來た。驚いた事にはさうして音もなく泡だつてゐるうちに、ほんの二三分の間に、海面はぐつと高まつてゐるのであつた。約一個月の間見て暮した宿屋の前の海に五つ六つの岩が並び、滿潮の時にはそのうちの四つ五つは隱れても唯だ一つだけ必ず上部一二尺を水面から抜き出してゐる

一つの岩があつたが、氣がつけばいつかそれまで水中に沒してゐる。

『此奴は危險だ！』

私は周圍の人に注意した。そしてまさかの時にどういふ風に逃げるべきかと、家の背後から起つて居る山の形に眼を配つた。

海の水はいつとなく濁つてゐた。そして向う一帶の入江にかけて滿々と滿ちてゐたが、やがて、「ざアつ」といふ音を立つると共に一二町ほどの長さの瀨を作つて引き始めた。ずつと濱の上の方に引きあげてあつた漁船もいつかその異常な滿潮にゆら／＼と浮いてゐたのであつたが、急激な落ち潮に忽ち纜を斷たれて悠々と沖の方へ流れてゆく一つ二つが見えた。あれほど常平生船を大事にする濱の人たちも、それを見ながら誰一人どうしようといふ者がなかつた。

さうした景色を見ながら直ぐ心に來たのは沼津の留守宅の事であつた。四人の子供に、あの舊びてた家屋、男手の少いところでどうまごついてゐるであらうとおもふと、とてもぢつとしてゐられなかつた。この有樣では旣に電報線のきく筈はないと思ひながらも、兎に角郵便局まで行つて見ようと尻を端折つた。數日前から階下の部屋に滯在してゐる群馬縣の社友生方吉次君も、

『一人では心細いでせう、私もゆきませう。』

と同じく裾をまくしあげた。

郵便局は古宇村から一つの崎の鼻を曲つた向うの隣村立保（たちぼ）といふに在るのであつた。その鼻に沿うて海沿ひにゆく道路はツイ先刻第一の震動と共に崩壊するのを眼前見てゐた。で、その崎山の峠を越えてゆく舊道があるといふことをフッと思ひ出して、それを越えてゆくことにした。

古宇村は戸數六十戸ほどの、半農の漁村で、二つの崎山の間に一掴みに家が集つてゐるのである。その部落の間を通り抜けやうとすると、なんと敏速に逃げ出したことか、家といふ家がみな戸をあけすてたまゝ、屋内には早や一個の人影をも留めてゐなかつた。そしてずつと山の手寄りの田圃の間に一かたまりに集つて海面に見入つてゐるのが見えた。

部落を通り抜けて舊道を登りにかゝると、其處には木立のたちこんだ間に、幾つかの龜裂の出來てゐるのが見えた。荒れ古びた小徑の草むらの中には先から先と大小の石塊が眞新しく轉げ落ちてゐた。とても徐歩する事が出來ず、小走りに走つてその山蔭の村立保へと降りて行つた。

此處の龜裂は古宇より更にひどかつた。か細い女の身で大きな簞笥を横背負に背負ひ込んで山手の方へ青田中を急いでゐる者や、米俵を引つ擔いで走つてゐる若者などが入り亂れて見えてゐた。海岸の高みには老人たちが五六人額をあつめて遠くの海上を眺めてゐた。

郵便局に行くと一人の老人を廣い庭の眞中に寢かして、二三人の若い女が手に〳〵傘を持つてその周圍に日を遮つてゐた。病人らしかつた。案の如く電報電話とも不通であつた。心休めに、若し通ず

る様になつたら早速これを頼みますと頼信紙を頼んでおいて、二人はまた山の舊道を越えた。

古宇の村はづれにかゝると、土地の青年團の一人がわざ〳〵我々の方に歩いて來て、

『今夜は津浪が來るさうですから直ぐ彼處に行つてゝ下さい、村の者は皆行つてゐますから。』

と山の方を指ざした。坐りもやらずに群衆は其處に群つてゐる。

『難有う！』

海岸に似合はない人氣のいゝ人情の純なこの村の氣風を、改めてこの紅顔の一青年に見出しながら、私達は禮を言つて急いで宿に歸つた。

宿でも評定が開かれてゐた。元來いま歸りがけに見て來たところでは村内全部が雨戸を閉ぢて山の方へ引上げてゐるので、まだ平常のまゝに戸をあけてゐるといふのはこの宿屋一軒きりであつたのだ。それを私は私たちに對する宿の遠慮からだとおもつた。で、いま途中で逢つて來た青年の勸告のことを告げて、一緒にこれから立ち退かうと申し出た。

『それがネ旦那』

宿の婆さん――主人の母で七十近くの――が私の側に寄つて來た。そして安政二年にも地震と共に大津浪がやつて來て、この古宇村全帶を破壊し、洗ひ浚つて行つたことがある。その時に不思議にも此處一軒だけは地震にも崩れず、津浪にも浚はれず、人々に奇異の思ひをさせたのであつたが、もと

もとこの家は裏の山續きの岩を切り拓いてその上に建てたものであり、また僅かの事だが家の所在が一寸した崎の鼻の蔭に位置してゐるので津浪からも逃れたのであらうといふことになつてゐた、だから今度も大抵大丈夫ではあらうとおもふが、それとも旦那たちが氣味が惡ければ逃げませう、まァまァ念のために飯をばいまうんと炊いてゐる處だといふのだ。

しつかり者のこの老婆の言ふことをば何故だか其儘信用したかつた。そして若しもの事のあつた時の用意だけをしておいて山へ逃げるのをば暫く見合はすことにした。

それでも屋内に入つて居れなかつた。緣側に腰かけるか庭に立つか、斷えず搖つて來るのに氣を配りながらも海面からは眼が離せなかつた。

『や、壯快丸ぢやないかナ。』

私は思はず大きな聲でさう言ひながら庭先へ出て行つた。遙かの沖に、唯だ一個の白點を置いた形で眼に映つた船があつた。其時どうしたものか見渡す沖には一艘の小舟も汽船も影を見せなかつた。其處へ白い浪をあげて走つて來るこの一艘が見え出したのだ。

『ア、ほんとだ、壯快だ〳〵、オーイ、壯快丸がけえつて來たよう。』

宿の息子も誰にともない大きな聲をあげた。壯快丸とはこの古宇村の人の持船で、此處から他三四ケ所の漁村を經て沼津へ毎日通つてゐる發動機船であるのだ。

『今日は直航でけえつて來たナ、どうだいあの浪は!』

裸體のまゝの宿の亭主も出て來た。なるほどひどい浪である。艫にあがつてゐるその白浪のために、こちらに直面してゐる船の形は殆んど隱れてしまつてゐるのだ。

『ひでえ煙を出すぢァねエか、まるで汽船とおんなじだ、全速力で走つてやがんナ。』

いよ〳〵壯快丸だと解つた頃には山に逃げてゐた人たちもぞろ〳〵とその船着場ときめてある海岸に降りて來て集つた。私たちもその中に入つてゐた。船は全く前半身を浪の中に突き入れる樣にして速力を出してゐる。そして間もなく入江の中に入つて來た。

船内には無論客も荷物もなく、丸裸體の船員だけが二三人浪に濡れて見えてゐた。

『どうだい、沼津は?』

『ええもんだ、船着場んとこん土藏が二三軒ぶつ倒れた、狩野川がまるで津浪で船が繫いでおかれねえ。』

まだ碇をもおろさない船と陸の群衆との間には早や高聲の問答が始まつた。

小舟で漕ぎつける人も出て來た。そして其處あたりから傳へられたらしく、今夜の十二時に氣をつけろ、でつけえ奴が搖つて來ると沼津の測候所でふれを出した、三島町は全滅で、山北では汽車が轉覆して何百人かの死人が出たさうだ、など、入江向うの新聞が異常な緊張を以て口から口に傳へられ

た。其處へ誰から渡されたとも氣のつかぬ手紙が私の手に渡された。大悟法利雄君の手である。胸を躍らせながら封を切つた。

ひどい地震でしたネ、先生大丈夫ですか。こちらは唯だ壁と屋根瓦が落ちたゞけで皆無事ですから御安心下さい。

引き續いて來た三つの大震動がいまやつと鎭まつたところ。先生が心配してゐらつしやるだらうと思ふので取敢へずこれだけを書いて船に驅けつけます。

と簡單だが、これだけ讀んで私はほつとして安心した。そしてよくこそ取込んだ間にこれだけでも知らして呉れたと大悟法君に感謝し、船の人たちにも感謝した。

いそ〳〵と宿へ歸らうとすると、其處の道ばたに一人の少年が坐つてゐる。見れば見知合の郵便配達夫で、顏色が眞蒼だ。

『どうした、おなかでも痛いか。』

と訊くと、自分の頭を指ざす。

幸ひその側に醫者の家があるので其處へ連れて行つた。

『ア、腦貧血ですよ、これは！』

と言つたきり、藥の事をば何とも言はず、そゝくさと何處かへ出て行つた。お醫者樣ひどく惶てゝゐるのである。

止むなく私は宿に少年を連れて歸つた。そして緣側に寢かし、仁丹など飲ませて靜かにさせながら、やがて訊いて見ると、これから二里ほど岬の方に離れて江梨といふ漁村がある。其處まで配達に行つて歸つて來る山の中で例の『ドシン！』に出會つたのださうだ。山の根に沿うた路のことで大小雜多な石ころが、がら〳〵と落ちて來る、人家はなし、走らうにも足がきかず、漸く此處まで出て來たらもう立つて居る事も出來なくなつたのださうだ。

夕方まで寢てゐると、顏色も直つて、笑ひながら歸つて行つた。

『サテ、慄へてばかりゐても爲樣がない、一杯元氣をつけませうか。』

さう言ひながら私は二階に酒の壜をとりに上つて行つた。そして、思はず立ち止りながら大きな聲で笑ひ出した。倒れも倒れたり、一升壜が三本麥酒壜が三本——これらは皆カラであつた——ウヰスキィ（一本はカラ）二本が、全部橫倒しになつて部屋のそちこちに泳ぎ出して來てゐるのだ。時ならぬ笑聲に驚いて宿の亭主も上つて來た。そして一緒に笑ひ出した。

『一本取つて來ませう。』

『然し、店は戶をしめてましたよ。』

「なァに、こぢあけて取つて來ますよ。」

村はほんとにノンキであつた。果して一升壜を提げて、なほ罐詰をも持つて、人の子一人ゐない部落の方から亭主は歸つて來た。『先生、惜しいことをしましたよ。店では實のある奴が二三本ぶつ壞れて酒の津浪でしたよ。』

庭の一隅に板を並べ茣蓙を敷き、其處を夕餉の席とした。生方君と今一人、二三日前から泊り合せてゐる眞田紐行商人の老爺との三人が半裸體になりながら冷酒のコップを取つた。其處へ消防が來、青年團の人たちが見舞にやつて來た。その間にも、ヅシン、ヅシンと二三度搖つて來た。海は然し却つて不氣味な位ゐに凪いでゐた。そしてまた何といふ富士山の冴えた姿であつたらう。

雲一つない海上の大空にはかすかに夕燒のいろが漂うてゐた。そしてその奧には澄み切つた藍色がゆたかに滿ち渡つてゐる。其處へなほ一層の濃藍色でくつきりと浮き出てゐるのが富士山であるのだ。

『斯んな綺麗な富士をば近來見ませんでしたね工、何だか氣味の惡い位ゐに冴えてるぢァありませんか。』

暫くもそれから眼を離せない氣持で私は言つた。

やがて四邊（あたり）が暗くなつた。暮れた入江の丁度眞向う、山の端の空が、半圓形を描いてうす赤く染つて見えた。

『火事だナ、三島には遠いし、何處でせう。』

『小田原見當ですネ。』

『箱根の山でも噴火したではないでせうか。』

噴火ならば爆音がある筈である。火事とするとても小さなものではない。

『今夜の十二時に氣をつけろつてのは本當でせうか、どうしてさういふ事が解るでせう。』

『中央氣象臺からでも何か言つて來たのでせう。』

『電報がきくか知ら。』

戸外に寢るには私は風邪が恐かつた。で、緣側に床を伸べて横になつた。ツイ鼻さきの前栽には鈴蟲が一疋、夜どほしよく徹る聲で鳴いてゐた。

夜警の人が折々中庭に入つて來た。

九月二日早朝、出溢る壯快丸を村中して促して沼津に向つた。乘船した人の過半は沼津の病院に病人を置いてゐる人たちであつた。

壯快丸から降りると私はすぐ俥を呼んだ。町中すべて道路に疊を敷いて坐つてゐた。一月ほど見なかつたこの町の眼前の光景が一層私には刺戟強く映つた。

『オ、今、お歸りですか。』

と聲をかくる知人もあつた。

香貫の自宅近くの田圃中の畦道には附近の百姓たちが一列に席を敷き、布團を敷いて集つてゐた。私の姿を見るや否や、

『ア、けえつて來た〳〵。』

と誰となくさゝやく聲が聞えた。笑顔の二三人は立ち上つて頭をさげた。

門を入らうとすると、青い蚊帳が見えた。門から中門までの砂利の上、松や楓の木の間に三つ吊つてあるのだ。夜具が見え、ぬぎすてた着物が木の枝にかけてあつた。

『やァ、とうさんだ〳〵、かァさァん、とうさんが歸つて來たよゥ!』

忽ち湧き起る四人の子供たちの叫びが私を包んだ。

思ひがけぬ綿引蒼梧和尚の大きな圖體がのつそりと半吊りの蚊帳から表はれた。

『やァ、君が來てゐたのか!』

『ウン、一昨日來てひどい目にあつたよ。』

『さうか、それはよかつた。』

星君も日疋君も出て來た。彼等の下宿してゐる龜谷さん一家が私の宅に逃げて來て一緒に蚊帳を並べたのださうだ。大悟法君は壁の落ちた玄關から出て來た。

臨時の炊事場が裏庭に出來てゐた。頰かむりの妻がほてつた顏をして其處から來た。

『ヤァとうさんだ〳〵、うれしいな〳〵。』

子供の叫びはなか〳〵に止まなかつた。

三日には雨が來た。しかも強い吹き降りであつた。うろたへて庭のものを取り込んでゐる一方では室内にぽと〳〵といふ雨漏の音が聞え初めた。もと〳〵舊い家で、少し降りが強いと必ず漏るには漏つたが、それは場所がきまつてゐた。今度もツィその氣でゐると、座敷が漏る、茶の間が漏る、玄關、奧座敷、二階などは天井の板の目に列をつらねて落ちてゐる。器具を片寄せる。疊をあげる。不圖氣がついて一つの押入をあけて見ると其處の布團はぐつしよりだ。周章へて他のをあけて見ると其處も同斷である。臺所、便所にまでポチ〳〵と音が聞えだした。僅かに離室とそれに隣つた湯殿とだけが無事だ。湯殿は早速物置になつた。

其處へ例の「風說」がやつて來た。今夜から土地の青年團が夜警をするから、庭の木戸など一切締めずに彼等の通行に自由ならしめて貰ひ度い、と達して來た。

『恐いなァ、おとうさん、どうしませう。』

子供たちは眞實顏色を變へてゐる。

四日の夜なかであつた、たゞならぬ聲で私を呼ぶ者がある。一人ならぬ聲だ。三日の雨から庭に寢るのをよした代りに、雨戶はすべてあけ放つてあるので、早速私はその聲の方へ出て行つた。見ると五六人の青年が一人の男の兩手をとり、肩を捉へて居る。呆氣にとられてよく見ると、捕へられてゐる男は古宇で別れて來た、生方君であつた。急に私の方に來たくなり、夜みちをしてやつて來る途中、青年團につかまつた。何處へゆく、斯ういふ人の所へ行く、嘘を言へ、何が嘘だ、が嵩じてたうたう此處まで引きずられて來たのださうだ。青年たちも生方君も汗ぐつしよりである。

二日、三日、四日と夢中で過して漸く落着きかけた五日の午後、私は三島町の塚田君を見舞はうと思ひ立つた。同君には沼津の稻玉醫院副院長時代、始終子供たちの身體を診て貰つてゐた。三島に單獨に開業してまだ幾らもたゝぬにこの騷ぎで、しかもそちらは隨分ひどくやられたと聞いて前から氣になつてゐたのである。電車の運轉が止つてゐるので、舊街道の埃道をてく〳〵と步き始めた。

尻端折で步くといふ事が不思議に私の心を靜かにしてくれた。と共に急にいろ〳〵な事が思ひ出されて來た。先づ東京橫濱の知人たちの身の上である。

この三日あたりから今度の事變の範圍が漸く解りかけた。そして何より驚かされたのは東京橫濱地方に於ける出來事であつた。殆んど信じ難い事であつたが、而かも刻々にその事實が確められて來た。次いで起つて來たのはさうした大事變の中に於ける我が知人たちの消息如何である。何處々々が燒失したと聞けば其處に住んで居る誰彼の名が、顏が、直ぐ心に浮んだ。死傷何萬人と聞けばどうしてもその中に二人や三人は入つてゐなければならぬ樣な氣がしてならぬのである。丸ビルの八階はどうだ、六階はどうだつたらう、窓から飛んで二百人死んだといふではないか、通新石町の土藏はこれは最も危險だ、女の身でどうして逃げられたらう、身一つならばだが親を連れてはどんなに難儀したであらう、とそれからそれと想像が走る。しかも明るい方へは行かないでどうしても暗い方へ〳〵との み走りたがるのだ。先月伊豆に訪ねて來て吳れた時、今から思へばいつもほど元氣がなかつた、蟲が知らしてお別れに來たのではなかつたか、などゝ全く愚にもつかぬ事まで氣になつて來る。

便所に行つた時、枕についた時、僅かの隙を狙つては起つて來る此等の懸念や想像が、いま斯うして獨りで步いてゐると恰も出口を見付けた水の樣に汪然として心の中に流れ始めたのだ。果ては步調も速くなつて、汗をかきながら急いでゐたが、黃瀨川の橋にかゝつた時、私は步くのをよして其處の欄干に身を凭せかけた。そして汗を拭き帽子をとつてその熱苦しい想像邪念を追拂はうと努めた。が、それは徒勞であつたばかりでなく、却つて一種の焦燥をさへ加へた。焦燥はやがて一つの決心を私に與へた。

よし、行つて來よう、行つて見て來よう!』

さう思ひ立つともう大抵無事だと解つてゐる三島の方へなど行つてはゐられなかつた。三島はあと廻しだ、と思ひ捨てながらとつと、踵をかへして歩き始めた。

家に歸つてから妻との間にいろ／＼の問答や相談が繰返された。入京の非常に難儀なこと、私自身の健康のこと、旅費のこと、それからそれと頭の痛くなるほど繰返されてゐるところへ、ひよつこり庭先へ服部純雄さんがやつて來た。彼は昨日岡山から職員總代、學生總代其他と三人の人を連れて、

『君たちを掘り出すつもりでやつて來たのだが、まァ／＼噂の樣でなくてよかつた。』

と言ひながらその明るい笑顔を見せたのであつた。關西地方では最初沼津地方激震死傷數千云々といふ風に傳へられ、それに驚いて飛んで來たのであつたさうだ。その服部さんが勇しい扮裝を見せながら、『とても君危險で箱根から向うには行けないさうだ、此處まで來たついでに東京まで行つてやらうといま町でいろ／＼用意をしたんだが……』

と、その種々の危險を物語つた。

『それではあなたにも到底駄目ですネ。』

と諦め顏に細君が私を見た。

そして、その日の夕方、代りに大悟法君が萬難を冐して出かくるといふことに事は急變したのであつた。

明けて六日の午前中、大悟法君と二人沼津中を馳け廻つて用意を整へ、正午、折柄安否を氣遣つて伊豆から渡つて來て吳れた高島富峯君と共に大悟法君の悲壯な出立を沼津驛に見送つたのであつた。

箱根を越え、御殿場を越えて逃げて來た所謂罹災民の悲慘な姿で沼津驛前あたりが一種の修羅場化してゐる話をば人づてに聞いてゐたが、私が直接にさうした人を見たのはその六日の夕方、自宅の庭に於てゞあつた。

玄關に立つてゐる異樣ないでたちの青年に見覺えはあつたが、直ぐには思ひ出せなかつた。名乘られて見ればそれは三年ほど前に、當時長野市にゐた柴山武矩君方で逢つた同君の末弟四郎君であつた。

『ア、さうでしたネ、さァお上んなさい。』

『まだ二人ほど連れがあるんですが……』

『どうぞ、お呼びなさい。』

一人は四郎君のすぐ上の兄さんで早稻田大學、一人はその友人で農科大學の學生だと解つたが、三人とも古びた半纏を引つかけたまゝで、下はから脛の、見るからに變な樣子であつた。

『アッ！』

私は初めて氣がついた、彼等はすべて小田原の人であつたのだ。それで、この異樣な樣子が呑み込

めると同時に口早やに問ひ掛けた。

『君等はやられたのですね、どうでした、小田原は？』

『すつかりやられました、身體一つで燒出されました‥‥』

漸く私は彼等を座敷に招じた。聞けば彼等は三人共各學校柔道の選手で、九月一日には小田原小學校で始業式の濟んだあとが柔道大會となり、彼等は全て柔道着か裸體かになつて式場（雨天體操場などであつたらうと思ふ）に出てゐた。ドッと來ると共に學校は潰れてしまつた。幸ひ彼等のゐた場所は場内の中央であつたゝめ、落ちた屋根も其處だけは多少の空隙を殘してゐて壓死をば免れたが、まん中どころ以外に並んで見物してゐた幼い生徒たちは殆んど全部ひしやがれてしまつた。そのうち小使部屋から火が出た。何處をどう掻き破つて出たのだか兎に角に三人とも素裸體で、諸所に擦傷を負ひながらもつぶれた屋根の下から這ひ出す事が出來た。出て見ると町にはすつかり火が廻つてゐたさうだ。其處へ津浪が寄せ、やがて凄じい龍卷が起つて紙片の樣に人間其他を空中に卷きあげた。

『何しろ町中全部が燒けたものですから食物が無いのです、救助米が多少廻つてるのですけれど、如何してだか東京方面を主にして小田原などにはほんの申譯ばかりにしかよこさないのです、で、米を少し持つてゆかうとこれから鈴川の親戚まで行くところです。』

と一人が言ふと、一人は笑ひながら着てゐる半纏を引つぱつて、

『裸體ではしやうがないものですから、途中の親戚で道了講の宿屋をしてゐる家に寄つてこれを三枚貰つて來たのです。』

私は今朝小田原から山を越えて來たといふ三人に强ひて足を洗はせて、今夜此處に泊る事にさせた。そしてようこそ此處に私の住んでゐる事を思ひ出して呉れたと想つた。

酒を取りにやつた女中が歸つて來たらしく、勝手の方で時ならぬ笑ひ聲がするので行つて訊いて見ると、近所の者が酒屋に集つて、

『いま若山さんところに不〇〇人が三人入つて行つたが、どういふ事になるだらう。』

と騷いでゐたといふのだ。なるほどさう言はれゝば三人共髮の長い、眼のぎよろりとした、背の瘦高い連中で、おまけに人夫などの着さうな半纏を着たところ、〇人と見られても否やは言へぬ風采であつたのだ。

久し振だ、勿體ない樣だと言ひながら三人の人たちが盃をあけてゐるところへ、

『先生、やつて來ましたよ。』

と、聞き馴れた聲が玄關で起つた。思ひもかけぬ笹田登美三君が大きな荷物を擔いで立つてゐるのだ。

『やァ笹田さんだ〳〵。』

子供たちが一齊に飛び出して來た。同君は矢張り大阪地方の新聞記事を見て、不安でならぬので出懸けて來て呉れたのであつた。そしてそれこそ喰べものにも困つてゐはせぬかとわざ〳〵澤山な餠をついて擔いで來て呉れた。なほ來がけに寄つた大阪の某君の許から賴まれたと云つて渡された包を開いて見ると、食料、藥品、燃料と、くさぐさの心づくしが收めてあつた。

『まァほんとに、どうしませうねエ。』

一つ〳〵手にとつては妻は早や淚ぐんでゐる。

やがて皆床を敷いて橫になつた。その前から小さなのが一つ二つとゆれてゐたのであつたが、九時頃でもあつたか、やゝ大きいのがゆら〳〵と動いて來た。丁度私は便所に行かうと廊下を步いてゐた所で、『來たナ』と思つて立ち止つた途端にツイ眼の前の座敷から、

『ワッ！』

と言ふと身體を揃へて庭の方へ飛び出したものがあつた。びつくりして見ると小田原組の三人だ。揃ひも揃つて長いのが三人、水泳の飛び込み其處のけの恰好で、双手を突き擴げて二三間あまりも闇を目がけて跳躍した有樣はまつたく壯觀で、フッと思ふと同時にこみあげて來た笑ひは永い間私の身體を離れなかつた。

彼等も私に合はせて笑ふには笑つたが、それからどうしても屋內に眠る事が出來なくなり、たうとう茣蓙を持ち出して庭の木蔭に三人小さくかたまつて寢てしまつた。私たちは三日の雨の夜から引續いて屋內に寢る事になつてゐたのだ。

待たれるのは被害地からの便りであつた。大悟法君からの第一便は名古屋驛から來たがそれからぴつたり止つたまゝで何の音沙汰も無い。東京、橫濱の誰人からも來ない。每日町へ出かけて買つて來る大阪地方の新聞紙は日一日と不安を强め確かめてゆくばかりだ。

其處へ十日の正午少し前、電信配達夫が門前に自轉車を乘りすてた。その姿を見るとすぐ私は机を離れて玄關へ急いだのであつたが、妻の方が速く其處に出て受取つた。そして發信人の名を、

『ミ、チ、ヤ』

と讀んだのを耳にした。

『ナニッ！』

と言ひさま彼女の手から引つとつて中を見た。

『コチラヘキタアスユク』

シヅオカ局發である。

妻とたゞ眼を見合せた。

『生きてたナ！』

といふ感じが、言葉にならずに全身に浸み巡つたのである。

電報は二通であつた。他の一通の發信人には『トシヲ』とある。

『トウクウミナブ　ジ　アンシンセヨイマヨコハマニユク』

發局は同じく靜岡だ。

『道彌さんが生きて歸つて、それに利雄さんがことづけたのだ。』

と直ぐ思つた。

皆無事、の範圍は解らないが兎に角に重な人たちに事の無かつたとだけは解してよろしい。

泣くとも笑ふとも解らぬ顔を突き合せて夫婦はなほ暫く無言のまゝ緣側に立つてゐた。

『オイ、今日のお晝には一杯つけるのだよ。』

嚴として妻に命令した。地震記念に私は永年の習慣となつてゐた朝酒と晝酒とをやめる事に三四日前からなつてゐたのだ。

九月六日附、「再度上京の時」と脇書した鉛筆の葉書が十一日に中島花楠君から來た。あとで思つたのだが恐らくこれは高崎の停車場あたりで書かれたものだらう。

貴方のお宅もお見舞ひせず、失禮。遂々本所の兩親弟妹四人が完全に燒死したといふ悲しきお知らせをします。何が何だか解らない頭で燒跡をウロ〳〵してゐます。是から義弟の家へ（是は無事）整理にゆく處です。咲子の家（芝新堀）も全燒です。是にはまだ行きませんから生死は判りません。社友の中にも氣の毒な方が少くないでせう、高久君はどうしたらう。

中島君が早々東京へ出立した事をば名古屋の他の社友から早速通知があつて知つてゐた。行つてそして斯んな事になつたのだ、と暗然とした。後で直ぐこの取消は來たのであつたが。

十一日にミチヤさんが靜岡の實家からやつて來た。見るからに憔悴して、さながら生きた幽靈と云つた形である。不思議な氣持で食卓を中に相向ひながら、私は幾度も涙を飲んだ。瞳孔も窶つてゐず、ともすれば話の返事もちぐはぐになりがちであつた。

然し、この人に逢つて愈々東京の大體は解つた。誰も無事、彼も無事、あの人も私同樣着たまゝで燒出されたさうですけれど、命だけは助かりました、といふ同君の話を聞きながら、又しても瞼は熱くなつて來るのである。

『さうすると、殆んど全部東京の知人は助かつたといふわけか、どうも本統でない樣な氣がするが。』

『まつたく何かの奇蹟を聞く樣ですね。』

と妻も食卓にしがみつく樣にしてゐて言つた。

サテ、横濱が氣になる。長谷川も、齋藤も、梅川も、自宅は横濱で、會社は東京だ。

其處へ『トシヲ』の電報が來た。十二日午後零時三十分、『テッセンダイ』局發だ。

『ギンサクキリコブジイヘマルヤケ』

越えて十三日にまた同文のものが『ゴテンバ』局發で來た。おもふに同君が大事をとつて一は東北方面へ、一は關西方面へ逃げてゆく人に托して同文のものを發したのであつたらう。

それから續いて追々と各自に無事を知らせる通知が來たが、中に横濱の高梨武雄君からの封書で

（前略）以上の人みな無事、唯だ一人金子花城君のみ今以て行衞不明です。

と云つて來た。そして終にこの人だけは永遠に我等の世界の人でなくなつた事を、ずつと遲れて二十七日に知る事が出來た。

豫定した行數を夙うに超過しながら書きたい事は一向に盡きない。いつそ、この十日前後の記事を以てこの變體な日記文を終らうと思ふ。この偉大な事變に對して動かされた我等の心情も實に多大なものがあつた。然し、それはまだ／＼ものに書き綴るべき境地にまで澄んでゐない。我等はいまなほ實に不安な動搖の中に迷つて居るのだ。此處には唯だノート代りのこの記事を殘して恐しかつた『彼の時』の思ひ出にするのみである。（九月二十九日）

草鞋の話 旅の話

私は草鞋を愛する、あの、枯れた藁で、柔かにまた巧みに、作られた草鞋を。

あの草鞋を程よく兩足に穿きしめて大地の上に立つと、急に五體の締まるのを感ずる。身體の重みをしつかりと地の上に感じ、其處から發した筋肉の動きがまた實に快く四肢五體に傳はつてゆくのを覺ゆる。

呼吸は安らかに、やがて手足は順序よく動き出す。そして自分の身體のために動かされた四邊（あたり）の空氣が、いかにも心地よく自分の身體に觸れて來る。

机上の爲事に勞れた時、世間のいざこざの煩はしさに耐へきれなくなつた時、私はよく用もないのに草鞋を穿いて見る。

二三度土を踏みしめてゐると、急に新しい血が身體に湧いて、其儘玄關を出かけてゆく。實は、さうするまではよそに出懸けてゆくにも億劫なほど、疲れ果てゝゐた時なのである。

そして二里なり三里なりの道をせつせと歩いて來ると、もう玄關口から子供の名を呼び立てるほど元氣になつてゐるのが常だ。

身體をこゞめて、よく足に合ふ樣に紐の具合を考へながら結ぶ時の新しい草鞋の味も忘れられない。足袋を通してしつくりと足の甲を締めつけるあの心持。立ち上つた時、じんなりと土から受取る時のあの心持。

と同時に、よく自分の足に馴れて來て、穿いてゐるのだかゐないのだか解らぬほどになつた時の古びた草鞋も難有い。實をいふと、さうなつた時が最も足を痛めず、身體を勞れしめぬ時なのである。

ところが、私はその程度を越すことが屢々ある。いゝ草鞋だ、捨てるのが惜しい、と思ふと、二日も三日も、時とすると四五日にかけて一足の草鞋を穿かうとする。そして間々足を痛める。もうさうなるとよほどよく出來たものでも、何處にか破れが出來てゐるのだ。從つて足に無理がゆくのである。

さうなつた草鞋を捨てる時がまたあはれである。いかにも此處まで道づれになつて來た友人にでも別れる樣なうら淋しい離別の心が湧く。

『では、左樣なら！』

よくさう聲に出して言ひながら私はその古草鞋を道ばたの草むらの中に捨てる。獨り旅の時はことにさうである。

私は九文半の足袋を穿く。さうした足に合ふ樣に小さな草鞋が田舍には極めて少いだけに（都會には大小殆んど無くなつてゐるし）一層さうして捨て惜しむのかも知れない。で、これはよささうな草鞋だと見ると二三足一度に買つて、あとの一二足をば幾日となく腰に結びつけて歩くのである。もつともこれは幾日とない野越え山越えの旅の時の話であるが。

さうした旅をツイ此間私はやつて來た。

富士の裾野の一部を通つて、所謂五湖を廻り、甲府の盆地に出で、汽車で富士見高原に在る小淵澤驛までゆき、其處から念場が原といふ廣い〳〵原にかゝつた。八ヶ岳の表の裾野に當るものでよく人のいふ富士見高原なども謂はゞこの一部をなすものかも知れぬ。八里四方の廣さがあると土地の人は言つてゐた。その原を通り越すと今度は信州地になつて野邊山が原といふのに入つた。これは、同じ八ヶ岳の裏の裾野をなすもので、同じく廣茫たる大原野である。富士の裾野の大野原と呼ばるゝあたりや淺間の裏の六里が原あたりの、一面に萱や芒のなびいてゐるのと違つて、八ヶ岳の裾野は裏表とも多く落葉松の林や、白樺の森や、名も知らぬ灌木林などで埋つてゐるので見た所いかにも荒涼としてゐる。丁度樹木の葉といふ葉の落ちつくした頃であつたので、一層物寂びた眺めをしてゐた。

野邊山が原の中に在る松原湖といふ小さな湖の岸の宿に二日ほど休んだが、一日は物すごい木枯で

あつた。あゝした烈しい木枯は矢張りあゝした山の原でなくては見られぬと私は思つた。其處から千曲川に沿うて下り、御牧が原に行つた。この高原は淺間の裾野と八ヶ岳の裾野との中間に位する樣な位置に在り、四方に窪地を持つて殆んど孤立した樣な高原となつて居る。私は曾つて小諸町からこの原を横切らうとして道に迷ひ、まる一日松の林や草むらの間をうろ／＼してゐた事があつた。

其處から引返して再び千曲川に沿うて溯り、終にその上流、といふより水源地まで入り込んだ。此處の溪谷は案外に平凡であつたが、その溪を圍む岩山、及び、到る所から振返つて仰がるゝ八ヶ岳の遠望が非常によかつた。

そしてその水源林を爲す十文字峠といふを越えて武藏の秩父に入つた。この峠は上下七里の間、一軒の人家をも見ず、唯だ間斷なくうち續いた針葉樹林の間を歩いてゆくのである。常磐木を分けてゆくのであるが、道がおほむね山の尾根づたひになつてゐるので、意外にも遠望がよくきいた。近く甲州地の國師嶽甲武信嶽、秩父の大洞山雲取山、信州地では近く淺間が眺められ、上州地の碓氷妙義などは恰も盆石を置いたが如くに見下され、ずつとその奧、越後境に當つた大きな山脈は一齊に銀色に輝く雪を被いてゐた。

ことにこの峠で嬉しかつたのは、尾根から見下す四方の澤の、他にたぐひのないまでに深く且つ大きなことであつた。しかもその大きな澤が複雜に入りこんでゐるのである。あちこちから聳え立つた

山がいづれも鋭く切れ落ちてその間に深い澤をなすのであるが、山の數が多いだけその峽も多く、それらから作りなされた澤の數はほんとに眼もまがふばかりに、脚下に入り交つて展開せられてゐるのであつた。そしてそれらの澤のうち、特に深く切れ込んだもの、底から底にかけてはありとも見えぬ淡い霞がたなびいてゐるのであつた。

峠を降りつくした處に古び果てた部落があつた。秩父の谷の一番奧のつめに當る村なのである。削り下した嶮崖の中に一筋の繩のきれが引つ懸つた形にこびりついてゐるその村の下を流れる一つの谷があつた。即ち荒川隅田川の上流をなすものである。いま一つ、十文字峠の尾根を下りながら左手の澤の底にその水音ばかりは聞いて來た中津川といふがあり、これと栃本の下を流るゝものとが合して本統の荒川となるものであるが、あまりに峽が嶮しく深く、終にその姿を見ることが出來なかつた。

栃本に一泊、翌日は裏口から三峰に登り、表口に降りた。そして昨日姿を見ずに過ごして來た中津川と昨日以來見て來てひどく氣に入つた荒川との落ち合ふ姿が見たくて更にまた川に沿うて溯り、その落ち合ふところを見、名も落合村といふに泊つた。

斯くして永い間の山谷の旅を終り、秩父影森驛から汽車に乘つて、その翌日の夜東京に出た。すると其處の友人の許に沼津の留守宅から子供が脚に怪我をして入院してゐる、すぐ歸れといふ電報が三

通も來てゐた。ために豫定してゐた友人訪問をも燒跡見物をもすることもなくしてあたふたと歸つて來たのであつた。

この旅に要した日數十七日間、うち三日ほど休んだあとは每日歩いてゐた。それも兩三囘、ほんの小部分づゝ汽車に乘つたほか、全部草鞋の厄介になつたのであつた。

自宅に歸ると細君から苦情が出た、何日には何處に出るといふ風の豫定を作つておいて貰ふか每日行く先々から電報でも打つて貰はぬことにはまさかの時に誠に困るといふのである。

もつともとも思ふが、私の方でも止むを得なかつた。たとへば千曲川の流域から荒川の流域に越ゆる間など、ほゞ二十里の間に郵便局といふものを見なかつたのだ。

また私は健脚家といふでなく、所謂登山家でなく冒險家でもないので、あまり無理な旅をしたくない。出來るだけ自由に、氣持よく、自分の好む山河の眺めに眺め入り度いためにのみ出かけて行くので、行くさき／＼どんな所に出會ふか解らぬ間は、なか／＼豫定など作れないのである。

それにしてもどうも私には旅を貪りすぎる傾向があつていけない。行かでもの處へまで、われから强ひて出かけて行つて烈しい失望や甲斐なき苦勞を味ふ事が少くない。

然しそれも、

『斯ういふ所へもう二度と出かけて來る事はあるまい、思ひ切つてもう少し行つて見よう。』

といふ概念や感傷が常に先立つてゐるのを思ふと、われながらまたあはれにも思はれて來るのである。

今度の旅では幾つかの湖と、幾つかの高原と、同じ樣に幾つかの森林と、溪谷と、峰と、澤とを見、且つ越えて來た。順序よく行けば十日あれば廻り得る範圍である。それにしてはよく計畫された旅であつた。私の十七日かゝつたのは例の貪慾癖と、信州地で三四日友人等と會談してゐたゝめであつた。机の上に地圖をひろげて見てゐると、まだまだなか／＼行つて見度い處が多い。いつも考へる事だが、斯うして見ると日本もなか／＼廣大なものだ。どうか出來るならばせめてこの日本中の景色をでも殘る所なく貪り盡して後死にたいものだとしみ／＼思はざるを得ぬのである。

草鞋を穿いて歩く樣な旅行には無論幾多の困難が伴ふ。先づ宿屋の事である。次に飮食物の事である。

今度の旅でも私は二度、原つぱの中の一軒家に泊めて貰つた。二軒ともこの邊の甲州と信州との間の唯一の運送機關になつてゐる荷馬車の休む立場の樣な茶店で、一軒は念場が原の眞中、丁度甲信の

國境に當つた所であつた。時雨は降る、日は暮れる、今夜の泊りと豫定した部落まではまだこの荒野の中を二里も行かねばならぬと聞き、無理に頼んで泊めて貰つたのであつた。一軒は野邊山が原のはづれ、千曲川に臨んだ嶮崖のとつぱなの一軒家で、景色は非常によかつた。

それから妙な廻り合せで裁判所の判檢事、警察署長、小林區署長といふ客の一行から私は二度宿屋を追つ拂はれた、一度は千曲川緣の小さな鑛泉宿で、一度はそれから一日おいて次の日、その千曲溪の一番の奧にある部落の宿屋で。一夜は一里あまり闇の中を歩いて他に宿を求め、一夜は辛うじて同じ村内に木賃風の宿を探し出し、屋内に設けられた厩の二疋の馬を相手に村酒を酌んで冷たい夢を結んだ。別に追つ拂はれる事もないのだが矢張り斯うして長いものに卷かれてゐた方が自分の氣持の上に寧ろ平穩である事を知つて居るからであつた。

信州では、ことに今度行つた佐久地方では鯉は自慢のものである。成程いゝ味であるが、それも一二度のことで、二度三度と重なると飽いて來る。鑵詰にもいゝ物はなく、海の物は絕無と云つていゝ。たゞ難有いのは山の芋と漬物とであつた。私は何處でも先づこの二つを所望した。とろろ汁は出來のよしあしを問はず生來の好物だし、斯うした山國の常として漬物だけには非常な注意が拂つて漬けられてゐるので確かにうまい。味噌漬もいゝが、ことに梅漬がよかつた。この國では（多分この國だけではないかと思ふ）梅を所謂梅干といふ例の皺のよつた鹽鹹いものにせず、木にある生の實のまゝの丸みと張りと固さとを持つた漬け方をするのである。そして同じく紫蘇で美しく色づけられてゐる。これが何處に行つても必ず毎朝のお茶に添へて炬燵の上に置かるゝ。中の核を拔いて刻んで出す家もあり、粒のまゝの家もある。これをかりかりと嚙んで澁茶を啜るのはまことに私の毎朝の樂しみであつた。殆んど毎朝その容器をば空にした。また、時として酒のさかなにもねだつた。

田舍の漬物のことで一つ笑ひ話がある。ずつと以前、奧州の津輕に一月ほど行つてゐた事があつた。このあたりの食物の粗末さはまた信州あたりの比ではない。たいていのものをば喰べこなす私も後にはどうしても箸がつけられなくなつた。そして矢張り中で一番うまいのは漬物だといふ事になり、それればかり喰べてゐた。やがて其處を立つて歸る時が來た。土地の青年の、しかも二人までが、見てゐるところ先生はよほど漬物がお好きの樣である、どうかこれをお持ち下さいと云つてかなりの箱と樽とを差出した。眞實嬉しくて厚く禮をいひ、幾度かの汽車の乘換にも極めて丁寧に取り扱つて自宅まで持ち歸つた。そして大自慢で家族たちに勸めた。ところが、皆、變な顏をしてゐる。そんな筈はないと自分にも口にして見て驚いた。たゞ驚くべき鹹味が感ぜらるゝのみで、ツイ先日まで味はつてゐた風味はなかなかに出て來ないのである。やがて私は獨りで苦笑した。津輕にゐた時には他の食物に比してこれがうまかつたが、サテ他のものゝ味が出て來るともうこの漬物の權威はなくなつてゐるのであつたのだ。

酒であるが、因果と私はこれと離るゝ事が出來ず、既に中毒性の病氣見たいになつてゐるので殆んどもうその質のよしあしなどを言ふ資格はなくなつてゐると言つていゝ。朝先づ一本か二本のそれが濟まなくてはどうしても飯に手がつけられない。晝の辨當を註文する前に一本のそれを用意する事を忘れない。夕方はなほのことである。

それも獨りの時はまだいゝ、久し振の友人などゝ落合つて飲むとなると殆んど常に度を過して折角の旅の心持を壞す事が屢々である。恨めしい事に思ひながら、なほそれを改め得ないでゐる。いゝ年をしながら、といつも耻しく思ふのであるが、いつかは自づとやめねばならぬ時が來るであらう。

旅は獨りがいゝ。何も右言つた酒の上のことに限らず、何彼につけて獨りがいゝ。深い山などにかかつた時の案内者をすら厭ふ氣持で私は孤獨の旅を好む。

つく〴〵寂しく、苦しく、厭はしく思ふ時がある。

何の因果で斯んなところまでてく〳〵出懸けて來たのだらう、とわれながら恨めしく思はるゝ時がある。

それでゐて矢張り旅は忘れられない。やめられない。これも一つの病氣かも知れない。

私の最も旅を思ふ時季は紅葉がそろ〳〵散り出す頃である。

私は元來紅葉といふものをさほどに好まない。けれど、それがそろ〳〵散りそめたころの山や谷の姿は實にいゝ。

谷間あたりに僅かに紅ゐを殘して、次第に峰にかけて枯木の姿のあらはになつてゐる眺めなど、私の最も好むものである。

路にいつぱいに眞新しい落葉が散り敷いてその匂ひすら日ざしの中に立つてゐる。その間から濃紫の龍膽の花が一もと二もと咲いてゐるなどもよくこの頃の心持を語つてゐる。

木枯の過ぎたあと、空は恐しいまでに澄み渡つて、溪にはいちめんに落葉が流れてゐる、あれもいい。ホ、もうこの邊にはこれが來たのか、と思ひながら踏む山路の雪、これも尊い心地のせらるゝものである。枯野のなかを行きながら遠く望む高嶺の雪、これも拜みたい氣持である。

落葉の頃に行き會つて、これはいゝ處だと思はれた處にはまた必ずの樣に若葉の頃に行き度くなる。

これは一つは樹木を愛する私の性癖からかも知れない。

事實、世の中に樹木といふものが無くなつたならば、といふのが仰山すぎるならば、若し其處等の

山や谷に森とか林とかいふものが無くなつたならば、恐らく私は旅に出るのをやめるであらう。それもいはゆる植林せられたものには味がない、自然に生（は）えたまゝのとりどりの樹の立ち並んだ姿がありがたい。

理窟ではない、森が斷ゆれば自づと水が涸るゝであらう。

水の無い自然、想ふだにも耐へ難いことだ。

水はまつたく自然の間に流るゝ血管である。

これあつて初めて自然が活きて來る。山に野に魂が動いて來る。

想へ、水の無い自然の如何ばかり露骨にして荒涼たるものであるかを。

ともすれば荒つぽくならうとする自然を、水は常に柔かくし美しくして居るのである。立ち並んだ山から山の峯の一つに立つて、遠く眼にも見えず麓を縫うて流れてゐる溪川の音を聞く時に、初めて眼前に立ち聳えて居る巍々たる諸山岳に對して言ふ樣なき親しさを覺ゆることは誰しもが經驗してゐる事であらうとおもふ。

私の、谷や川のみなかみを尋ねて歩く癖も、一にこの水を愛する心から出てゐるのである。

今度の旅では千曲川のみなかみを極めて、荒川の上流に出たのであつた。

その分水嶺をなす樣な位置に在る十文字峠といふのは上下七里の難道であつたが、七里の間すべて神代ながらの老樹の森の中をゆくのである。

その大きな官有林に前後何年間かにわたつて行はれた盗伐事件が發覺して、長野埼玉兩縣下からの裁判官警察官林務官といふ樣な人たちがその深い山の中に入り込んでゐた。そしてそれらの人たちのために二度宿屋を追はれたのであつた。

千曲川の上流長さ數里にわたつた寒村を川上（かはかみ）村と云つた。

ずつと以前利根川の上流を尋ねて行つた時、水上（みなかみ）村といふのに泊つたことがある。

村の名にもなか〳〵しやれたのゝあるのに出會ふ。上州の奥、同じく利根の上流をなす深い溪間の村に小雨（こさめ）村といふのがあつた。恐しい樣な懸崖の下に、家の數二十軒ばかりが一握りにかたまつてゐる村であつた。その次の村、これはそれよりも一二里奥の同じ溪に臨んだ小雨村よりももつと寂しい京塚村といふのであつた。この村をば私は對岸の山の上から見て過ぎたのであつたが、崖の中腹に作られた七八軒の家が悉くがつしりした構へで而かも他に見る樣にきたなつぽくなく、いかにも上品な古びた村に眺められたのであつた。どうしたのか、折々この村をば夢に見ることがある。

荒川の上流と言つたが、二つの溪が落合つて本流のもとをなすのである。その一つの中津川といふもの、水上に中津川といふ部落があるさうだ。昔徳川幕府の時代、久しい間この部落の存在は世に知られてゐなかつた。よくある話の樣に、折々その溪奥から椀の古びたのなどが流れてくる。箭の折れたのも流れて來た。若しや大阪の殘黨でも隱れてゐるのではないかと土地の代官か何かゞ大勢を引率してその上流を探して行つた。果して思ひもかけぬ山の蔭に四五十人の人が住んでゐた。それといふのでその四五十人を何とかいふ蔓で何とかいふ木にくゝしつけてしまつた。そしてよく聞いて見ると大阪ではなくずつと舊く鎌倉の落人であることが解つた。村人はその時の事を恨み、この後この里にその何とか蔓と何の木とはゆめにも生ゆること勿れと念じ、今だに其の木と蔓とはその里に根を絶つてゐるといふ。

傳說は平凡だが、私は十文字峠の尾根づたひのかすかな道を歩きながら七重八重の山の奥の奥にまだまださうした村の在るといふことに少なからぬ興味を感じた。落葉しはてたその方角の遙かの溪間には折から朗かな秋の夕日がさしてゐた。その一個所を指ざして、ソラ、あそこにちよつぴり青いものが見ゆるだらう、あれが中津川の人たちの作つてゐる大根畑だ、と言ひながら信州地から連れて來た私の老案內者はその大きなきたない齒莖をあらはして笑つた。

燒岳を越えて飛驒の國へ降りついたところに中尾村といふ村があつた。十四五軒の家がばらばらに立つてゐるといふ風な村であつたが、その中の三四軒で、男とも女ともつかぬ風態をした人たちが大きな竈に火を焚いてせつせと稗を蒸してゐた。

越後境に近い山の中に在る法師溫泉といふへ、上州の沼田町から八九里の道を歩いて登つて行つたことがある。もう日暮時で、人里たえた山腹の道を寒さに慄へながら急いでゐると不意に道上で人の咳く聲を聞いた。非常に驚いて振仰ぐと、畑ともつかぬ畑で頻りと何やら眞靑な葉を摘んでゐる。よく見ればそれは煙草の葉であつた。

下野に近い片品川の上流に沿うた高原を歩いた時、その邊の桑の木は普通の樣に年々その根から刈り取ることをせず、育つがまゝに育たせた老木として置いてある事を知つた。だから桑の畑と云つても實は桑の林と云つた觀があつた。その桑の根がたの土をならしてすべて大豆が作つてあつた。すつかり葉の落ちつくした桑の老木の、多い幹も枝も空洞になつてゐる樣なのゝ連つた下にかゞんでぼつ〳〵と枯れた大豆を引いてゐる人の姿は、何とも言へぬ寂しい形に眺められた。

今度通つた念場が原野邊山が原から千曲の谷秩父の谷、すべて大根引のさかりであつた。枯れつくした落葉松林の中を飽きはてながら步いてゐると、不意に眞靑なもの、生えてゐる原に出る。見れば大根だ。馬が居り、人が居る。或日立寄つた茶店の老婆たちの話し合つてゐるのを聞けば今年は百貫

目十圓の相場で、誰は何百貫賣つたさうだ買つたさうだ、何處其處の馬はえらく痩せたが喰はせるものを惜しむからだ、といふ樣なことであつた。永い冬ごもりに人馬とも全くこの大根ばかり喰べてゐるらしい。

都會のことは知らない、土に噛り着いて生きてゐる樣な斯うした田舍で、食ふために人間の働いてゐる姿は、時々私をして涙を覺えしめずにはおかぬことがある。

草鞋の話が飛んだ所へ來た。これでやめる。

青年僧と叡山の老爺

一週間か十日ほどの豫定で出かけた旅行から丁度十七日目に歸つて來た。さうして直ぐ毎月自分の出してゐる歌の雜誌の編輯、他の二三雜誌の新年號への原稿書き、溜りに溜つてゐる數種新聞投書歌の選評、さうした爲事にとりかゝらねばならなかつた。晝だけで足らず、夜も毎晩半徹夜の忙しさが續いた。それに永く留守したあとのことで、訪問客は多し、やむなく玄關に面會御猶豫の貼紙をする騷ぎであつた。

或日の正午すぎ、足に怪我をして學校を休んでゐる長男とその妹の六つになるのとがどや／＼と私の書齋にやつて來た。來る事をも禁じてある際なので私は險しい顏をして二人を見た。

『だつてお玄關に誰もゐないんだもの、……お客さんが來たよ、坊さんだよ、是非先生にお目にかかりたいつて。』

坊さんといふのが子供たちには興味を惹いたらしい。物貰ひかなんどのきたない僧服の老人を想像しながら私は玄關に出て行つた、一言で斷つてやらう積りで。

若い、上品な僧侶が其處に立つてゐた。あてが外れたが、それでもこちらも立つたまゝ、

『どういふ御用ですか。』

と問うた。

返事はよく聞き取れなかつた。やりかけてゐた爲事に充分氣を腐らしてゐた矢先なので、

『え？』

と、やや聲高に私は問ひ返した。

今度もよくは分らなかつたが、とにかく一身上の事で是非お願ひしたい事があつて京都からやつて來た、といふ事だけは分つた。見ればその額には汗がしつとりと浸み出てゐる。これだけ言ふのも一生懸命だといふ風である。何となく私は自分の今迄の態度を恥ぢながら初めて平常の聲になつて、

『どうぞお上り下さい。』

と座敷に招じた。

京都に在る禪宗某派の學院の生徒で、鄕里は中國の、相當の寺の息子であるらしかつた。幼い時から寺が嫌ひで、大きくなるに從つていよ〳〵その形式一方僞禮一點張でやつてゆく僧侶生活が眼に餘つて來た。學校とてもそれで、父に反對しかねて今まで四年間漸く我慢をして來たもの丶、もうどうしても耐へかねて昨夜學院の寄宿舍を拔けて來た。どうかこれから自分自身の自由な生活が營み度

い。それには生來の好きである文學で身を立て度く、中にも歌は子供の時分から何彼と親しんでゐたもので、これを機として精一杯の勉强がしてみたい。誠に突然であるけれど私を此處に置いて、庭の掃除でもさせて呉れ、といふのであつた。

折々斯うした申込をば受けるので別にそれに動かされはしなかつたが、その言ふ所が眞面目で、そしてよほどの決心をしてゐるらしいのを感ぜぬわけにはゆかなかつた。

『君には兄弟がありますか。』

『いゝえ、私一人なのです。』

『學校はいつ卒業です。』

『來年です。』

『歌をばいつから作つてゐました。』

『いつからと云ふ事もありませんが、これから一生懸命にやる積りです。』

といふ風の問答を交しながら、どうかしてこの昂奮した、善良な、そしていつこくさうな青年の思ひ立ちを飜へさせようと私は努めた。別に歌に對して特別の憧憬や信念があるわけでなく、唯だ一種の現狀破壞が目的であるらしいこの思ひ立ちを矢張り無謀なものと見るほかはなかつたのだ。

然し、青年はなか〳〵頑固であつた。永い間考へ拔いて斯うして飛び出して來た以上、どうしても

目的をば貫きます、先生が許して下さらねばこれから東京へなり何處へなり行きます、と言ひ張つてゐる。

私は彼を散歩に誘うた。初めはほんのかりそめごとにしか考へなかつたのだが、あまりに彼の本氣なのを見ると次第にこちらも本氣になつて來た。そしていろ〳〵自宅の事情を聞き、彼の性質をも見てゐると、どうしても彼を此處で引き止めねばならぬ氣になつて來た。氣持を變へるため、散歩をしながら若し機會があつたら徐ろにそれを說かうと、出澁ぶるのを無理に連れだつて、わざと遠く千本濱の方へ出かけて行つた。

其處に行くのは私自身實に久しぶりであつた。松原の中に入つてゆくと、もう秋といふより冬に近い靜けさがその小松老松の間に漂うてゐた。海も珍しく凪いでゐた。入江を越えた向うには伊豆が豐かに横はり、炭燒らしい煙が二三ヶ所にも其處の山から立昇つてゐるのが見えた。

砂のこまかな波打際に坐つて、永い間、京都のこと、其處の古い寺々のこと、歌のこと、地震のこと、それとはなしにまた彼の一身のことなどを話してゐるうちに、いつか上げ潮に變つたと見えて小波の飛沫が我等の爪先を濡らす樣になつた。では、そろ〳〵歸りませうか、と立ち上る拍子に彼は叫んだ。

『ア、見えます〳〵、いいですねェ。』

と。先刻からまちあぐんでゐた富士が、漸くいま雲から半身を表はしたのだ。昨夜の時雨で、山はもう完全にまつ白になつてゐた。

『ほんとうにいゝ山ですねェ、何と言つたらいゝでせう。』

私はそれを聞きながら思はず微笑した。漸く彼が全てを忘れて、青年らしい快活な聲を出すのを聞いたからである。

歸つて來ると、子供たちが四人、門のところに遊んでゐた。そして、

『ヤ、歸つて來た〳〵。』

と言ひながら飛びついて來た、一人は私に、一人はその若い坊さんに、といふ風に。

『なぜ斯んな羽織を着てんの？』

客に馴れてゐる彼等は、いつかもうその人に抱かれながらその墨染の法衣の紐を引つ張り、斯うした質問を出して若い禪宗の坊さんを笑はすほどになつてゐた。

その翌朝であつた。日のあたつた緣側でいま受取つた郵便物の區分をしてゐると、中から一つの細長い包が出て來た。そしてその差出人を見ると、私は思はず若い坊さんを呼びかけた。

『これは面白い、昨日君に話した比叡山の茶店の老爺から何か來ましたよ、また短册かな。』

さう言ひながらなほよく見ると、表は四年も昔に引越して來た東京の舊住所宛になつてゐる。スル

ト、こちらに越して來てから一度の音信もしなかつたわけである。中から出たのは一枚の短册と一本の扇子であつた。

短册には固苦しい昔流の字で、

『うき沈み登り下りのみち行を越していまては人のゆくすゑ、粟田』

と書いてある。粟田とは彼の苗字である。變だなァ、といひながら一方の扇子を取つて見ると何やら書いた紙で包まれてある。紙には矢張粟田爺さんの手らしく、

『失禮ながら呈上仕候』

とある。中を開いてみると、

『粟田翁の金婚式を祝ひて』

といふ前書きで、

『茶の伴や妹背いそちの雪月花、佳鳴』

と認めてある。

『ホホオ！』

私は驚いた。

『あのお爺さん、金婚式をやつたのかね。』

『へ、エ、もうそんなお爺さんですか、でもねエ、よく忘れずに斯うして送つて呉れますわねエ』

いつか側に來てゐた妻も斯う言つた。

さうすると短册の『うき沈み……』も意味が解つて來る。念のために裏をかへしてみると、『大正十二年』と大きく眞中に書いて、下に二つに割つて『七十六歳、六十五歳』と並べて書いてあるのであつた。

大正七年の初夏であつた。私は京都に遊んで、比叡山に登つてすぐ降りて來るといふでなく、暫く滯在したい希望で、山上の朝夕をいろいろ心に描きながら登つて行つたのであつた。登りついたのは夕方で、人に教はつてゐた通り、大勢の人を泊めて呉れるといふ宿院といふに行き、取次に出た老婆に滯在のことを頼んだ。ところが老婆の答は意外であつた。今はたゞ一泊の人を泊めてあげるだけで、滯在の人は一切泊めることはならぬ規則になつてゐるのぢや、といふのだ。イヤ、今までよく滯在させて貰つたといふ話を聞き、その積りで登つて來たので是非さうして貰ひたい、と頼むと、今までは今までや、ならんといふたらならんのぢや、といふ風で、まご／＼するとその夜の泊りも許されまじい有樣となつた。止むなく、私はどうか今夜だけ、と頼んで漸く部屋に通された。老婆がその通り、給仕に出た小僧も亦た不愉快千萬な奴で、遙々樂しんで來たこの古めかしい山上の幻の影は埓もなくくづれてしまつた。

で、翌朝夜があけるのを待つて宿院を出た。すぐ下山しようとしたが、斯んな風では恐らく二度とこの山に登る氣にもなれまい、來たを幸ひ、普通一遍の見物だけでもやつて行かうと踵を返して、根本中堂からずつと奧の方へ登つて行つた。當山の開祖傳教大師の遺骨を納めてあるといふ淨土院へゆく路と四明ヶ嶽へ行く路との分れ目の所に一軒の茶店のあるのが眼についた。その時のことを書いておいたものがあるのでその文章を此處に引いて見よう。

ちやうど通りかかつた徑が峠みた樣になつてゐる處に一軒の小さな茶店があつた。動きやまぬ霧はその古びた軒にも流れてゐて、覗いてみれば薄暗い小屋の中で一人の老爺が頻りに火を焚いてゐる。その赤い火の色がいかにも可懷しく、ふら〳〵と私は立ち寄つた。思ひがけぬ時刻の客に驚いて老爺は小屋の奧から出て來た。髮も頰鬚も半分白くなつた頑丈な大男で、一口二口話し合つてゐるうちにいかにも人のいい老爺であることを私は感じた。そして言ふともなく昨夜からの愚痴を言つて、何處か爺さんの知つてる寺で、五六日泊めて呉れる樣な所はあるまいか、と聞いてみた。暫く考へてゐたが、あります、一つ行つてきいて見ませう、だが今起きたばかりで、それに御覽のとほり私一人しかゐないのでこれからすぐ出かけるといふわけにはゆかぬ、追つ附け娘たちが麓から登つて來るからそしたら直ぐ行つて聞合せませう。まア旦那はそれまで其處らに御參詣をなさつてゐたらいいだらうといふ思ひがけない深切な話である。私は喜んだ。それが出來たらどれだけ仕合せだか分らない、是非一つ骨折つて呉れる樣にと賴み込んで、サテ改めて小屋の中を見廻すと駄菓子に夏蜜柑煙草などが一通り店さきに並べてあつて、奧には土間の側に二疊か三疊ほどの疊が敷いてあるばかりだ。お爺さんはいつも一人きり此處にゐるのか、ときくと、夜は年中一人だが、晝になると麓から女房と娘とが登つて來る、と言ひながら、ほんの隱居爲事に斯んなことをして居るが馴れて見れば結局この方が氣樂でいいと笑つてゐる。小屋のうしろは直ぐ深い大きな溪で、いつの間にか此處らに薄らいだ霧がその溪いつぱいに密雲となつて眞白に流れ込んでゐる。空にもいくらか青いところが見えて來た。では一廻りして來るから何卒お賴みすると言ひおいて私は茶店を出た。

その賴みは叶つたのであつた。叶つて私の泊る事になつた寺は殆んど廢寺にちかい荒寺で、住職もあるにはあるのだが麓の寺とかけ持ちで殆んどこちらに登つて來ることもなく、平常はただ年寄つた寺男が一人居るだけであつた。それだけに靜寂無上、實に好ましい十日ばかりを私は深い木立の中の荒寺で過すことが出來た。

その寺男の爺といふのがひどく酒ずきで、家倉地面から女房子供まで酒に代へてしまひ、今では木像の朽ちたが如くになつてその古寺に坐つてゐるのであつた。耳も殆んど聾であつた。が、同じ酒ずきの私にはいい相手であつた。毎日酒の飮める樣になつた老爺の喜びはまた格別であつた。旦那が見

えてからお前すつかり氣が若くなつたぢアないか、と峠茶屋の爺やにひやかされるほど、彼はいそいそとなつて來た。峠茶屋の爺やもまたそれが嫌ひでなかつた。

私の滯在の日が盡きて明日はいよ〳〵下山しなくてはならぬといふ夜、私は峠茶屋の爺やをも招いてお寺の古びた大きな座敷で最後の盃を交し合つた。また前の文章の續きを此處に引かう。

寺の爺さんは私の出した幾らでもない金を持つて朝から麓に降りて、實に克明にいろ〳〵な食物を買つて來た。酒も常より多くとりよせ、その夜は私も大いに醉ふ積りで、サテ三人して圍爐裡を圍んでゆつくりと飮み始めた。が、矢張り爺さんたちの方が先に醉つて、私は空しく二人の醉ぶりを見て居る樣なことになつた。そして口も利けなくなつた二人の老爺が、よれつもつれつして醉つてゐるのを見てゐると、樂しいとも悲しいとも知れぬ感じが身に湧いて、私はたび〳〵泣笑ひをしながら調子を合せてゐた。やがて一人は全く醉ひつぶれ、一人は剛情にも是非茶屋まで歸るといふのだが、脚がきかぬので私はそれを肩にして送つて行つた。さうして愈々別れる時、もうこれで旦那とも一生のお別れだらうが、と言はれてたうとう私も涙を落してしまつた。

その峠茶屋の爺さんが卽ち今度金婚式を擧げた粟田翁であるのだ。その時、山から京都に降りると其處の友だちが寄つて私のために宴會を催して呉れた。その席上で私は山の二人の老爺のことを話した。するとその中の二三人が其後山に登つてわざ〳〵茶屋に寄り、斯く〳〵であつたさうだナといふ話をした。へえ、さういふ人であつたのかと云つて爺さんひどく驚いたといふことをその人から書いてよこした。それから程なく、古い短冊帖に添へて、これは昔から自分の家に傳はつて居るものであるが、中に眼星しい人の書いたものが入つてゐはせぬか、どうか見て呉れと云つてよこした。これが粟田淺吉といふ名を知つた初めであつた。

短冊帖には三十枚も貼つてあつたが、私などの知つてゐる名はその中にはなかつた。斯ういふことに詳しい友だちにも持つて行つて見て貰つたが、當時の公卿か何かだらうが、名の殘つてゐる人はゐないといふことであつたのでその旨を返事し、なほ自分自身のものを一二枚添へてやつたのであつた。それらのことを、昨日千本濱で京都附近の話の出た時に、その若い坊さんにしたのであつた。其處へこの短冊と扇子とが送つて來たのだ。爺さん、まだ頑丈であの山の上の一軒家に寢起きしてゐるのであるかとおもふと、いかにもなつかしい思ひが胸に上つて來た。すると、あの寺男の爺さんはどうしてゐるであらう。

さういふことを考へてゐると、若い坊さんは急に改つて兩手をついた。そして、昨日からのお話で、今度の自分の行爲が餘りに無理であることが解つた、自分の一生の志願を全然やめ樣とは思はぬが、とにかく今の學校だけは卒業して年寄つた父をも安心させます、では早速ですがこれから直ぐお暇します、といふ。さうすると私も妻も、わづか一日のうちに親しくなつてしまつた幼い子供たちも、何

だか名殘が惜しまれて、もう二三日遊んで行つたらどうかと、勸めたけれども、學校の方がありますので、と云つて立ち上つた。家内中して門まで送つて出た。帽子もない法衣のうしろ姿を見送りながら私は大きな聲で呼びかけた。

『歸つたら早速比叡に登つて見給へ、さうしてお爺さんに逢つてよろしく言つて下さい。』

上京記

牧曉村君

一昨日廿二日に一寸東京へ行つて來ました。この一月ほど毎晩半徹夜（僕一流のやりかたなので夕方食事を濟ますと程なく寢てしまひます、大抵七時から八時の間です、そして夜なかに起きます、十二時から一時二時の頃です、それから机に向つて家族たちの朝飯の時まで爲事にかゝり、一緒に食事をして新聞を見ながら、床に入り約一時間位ゐ眠ります、時には朝食をば自分で自分の部屋で整へる事もあります。）を續けてゐるといふ忙しい間でしたので、出來るならば行かずに濟ましたいと思ひましたけれど、どうしても手紙で用の足らない事でしたので、日歸りの事にして出かけました。

用事といふのは、東京日々新聞社で東宮御成婚記念事業の一として募集した「國民の歌」の選をやる事だつたのです。三萬通も集まつた中から先づ社の學藝部で豫選をし、それを印刷にしたのが僕等選者の許に廻つて來てゐました。それの出來がよければそれらの各篇に點數をつけて送り返すだけでも間に合つたのだが、因果な事に、いかにも拙い、先づ五十點といふ點數をつけ樣といふのが無いの

です。とても此儘では批評も書きにくいし、とにかくその選評會に出席する必要があると思つたので、朝六時四十分の汽車で出かけました。

牧君

僕が沼津に引越して來て今年でいつの間にやら四個年になつてゐます。もうあと幾つか寢ると足掛五個年になるわけです。その間にそれこそ五六回しか僕は上京してゐません。どうも東京といふ處が煩はしくて、恐しくて、さう氣輕に出懸けるといふ氣になれなかつたのです。ですから、例の地震後の東京をも實はまだ見てゐないのでした。イヤ、先日信州から秩父の奥の山めぐりをした歸りに東京を通りましたけれど、上野驛からずつと山の手線を廻つて來たので殆んど何處をも見ずに通つて來たのです。

今までならば四時間と少しで沼津から東京へ行けたのですけれど、今では五時間半ばかりかゝります。やはり地震後の線路の修繕がまだ充分に出來てゐないのです。横濱または品川をすぎてからの東京の燒跡の哀れさ物凄さが汽車の窓から見えましたけれど、それらの事はもう大抵御存じでせうから略します。とにかく、十二時三十何分かに東京驛に着きました。會議は午後の二時から東京日々社で開かれる事になつてゐましたので、それまでにはまだ時間があるし、第一時刻でもあるから先づ晝飯をたべようと思ひました。で汽車を降りると直ぐ驛の入口の方に廻つて精養軒で出してゐる食堂でたべようと出かけました、何の氣なしに高い足駄を――朝からひどい降りでした――引きずつてその入口まで行つてみて驚きました。中は一杯の人です。見るからに濛々たる湯氣だか人間のウン氣だかが中を立ち罩めてゐます。何といふことなく入口に僕は立ち二階の方へ上らうかと思ひましたが、足駄を引きずつては一寸登つてゆきにくい。

牧君、御存じの通り僕は昔からずつと和服黨で、學校の豫科を出て以來、まだ洋服といふものを着たことがない。それがあゝした洋館の人ごみの中に立つて見ると、此頃ではひどく眼だつ樣になりました。つまり、このあたりの人間がみな洋服を着る樣になつたのです。ですから、あゝした建物の廊下を歩くのにガラ〳〵と音する下駄、ことに足駄などを引きずつたのでは全く氣がひけます。で止むなく其處を諦めて驛を出てしまひました。

サテ、何處にしようかと考へました。日本橋の方にでも出て行けば恰好な家のあるのを知つてゐますが、それも燒けない前の話だし、サテどうしようかとびしよ〳〵の雨の中に立つて考へました。そしてツイ眼の前に聳えて居る例の丸の內ビルヂングの地下室一帶がみな何や彼やのたべもの屋であつた事を思ひ出しました。

その丸ビルの正門の入口に行つてみてまた驚きました。それこそ肩を斜めにし身を曲げてからでなくては入り兼ねるといふ混雜です。なんといふ人間の多さぞやと思ひながら、傘をつぼめ足駄をカラ

カラ鳴らしながらその中へ割込んでゆきました。そして地下室の方へ降りて行かうとしてまた自づと立ち留まることになりました。その階段の混雜はその丸ビル一階の廣場いつぱいになつて右往左往してゐる中でも最も烈しい場所になつてゐるのです。暫らくぼんやりしてゐましたが、それでも其處へいつて行かないことにはもう一寸他で喰べる所が無いと思つたので、勇氣を出して人海に揉まれながら降りてゆきました。

地下室の廊下は上より狹いだけに一層混雜が眼につきます。先づ曾て行つたことのある其處の中央亭支店へと行つてみますと、東京驛の食堂以上の濛々たるウン氣です。全く人の頭が大きな部屋中に波を打つてゐるのです。その頭の一個々々がみなそれで小刻みに動いてゐるのがよく感ぜられます。その筋向うの花月食堂は、とうろたへた眼を向けますとこれまた同樣の物すごさです。思はず僕はニヤリとしました。とても我々の樣な氣の弱いものには割り込む事の出來ない物凄い力がそこら中に張り滿ちてゐるからです。おとなしくあきらめて階上へ出やうとしながら、同じ地下室の丁度その横丁どほりの樣な所に蕎麥屋だの壽司屋だの小店のあつたのを思ひ出しそちらへ行つて見ますと、驚くべし〳〵、何處もかしこも小さいは小さいなりに皆ぎし〳〵と詰つてゐます。オヤ〳〵と思ふうちに、いつの間にやら僕の食慾は影も形もなくなつてゐたのです。食慾がない處か、飯の十杯も喰つた後の樣に、なんだか咽喉もとまでこみあげて來てゐる氣持です。

苦笑滿腹で僕は再び寒い〳〵雨の中に立ちました。もう食事を斷念して、いつそ日比谷の方でも散步して來ようかとぶら〳〵馬場先門の方へ歩きかけると、ツイ其處に文化食堂と大きな看板をかけた食べもの屋が眼につきました。構へは大きいがお疎末千萬な例のバラックです。そしてその窓さきに一升瓶の竝べてあるのが眼につきました。それを見ると、一時影を消してゐた僕の食慾――だが飲慾だかゞまたフラ〳〵と腹の中に起きて來ました。何でもいゝから一杯飲んでやらうとそゝくさ其の入口から入らうとしたところが、ドッコイさうはゆかないのです。

馬鹿々々しいぢやァありませんか、停車場で切符を買ふ時の樣に、また此間まで盛んに寫眞になつてゐた玄米の配給を受くる遭難者の樣に、その入口にはずつと一列に人間が列を作つてゐるのです。何をするのだと見ると、さうして竝んだ順序に天どんだとかお刺身だとかジャミ附パンだとかカツレツだとかチャアシユウメンだとかお汁粉だとか云つてめい〳〵たべたいものゝ切符を買つて中に入つてゆくのです。それを眺めながら僕はもう呆れる勇氣もなくなり、おとなしくその行列に加はり順番を待つて二合瓶二枚、鴨南蠻二枚、都合四枚の切符を買ひとつて中に入りました。

同じく人の頭の波です。急には自分の椅子など、見附かりさうにありませんでしたから、先づつか〳〵と酒の壜の竝んだ方に行つて突立ちながらその一本を所望しました。無論うや〳〵しく一枚の切符を差出してからです。でも其處の酒場を受持つてゐる小母さんはなか〳〵親切で、とにかくお尻を

半分位ゐ載つけるだけの席を作つてくれました。そしてお燗をもつけて呉れました。ヤレ一杯にありついたと思ふと急に亞鉛屋根に降りつける雨の音が耳につき、隙間だらけの板がこひから吹き込む風が身にしみ出しました。

牧君

だら〳〵書きつけて來た樣だが、とにかく何ぼ時間だとは云ひながらこの食物に群がつてゐる人間の夥しい數だとかそんなごた〳〵した中で平氣でガブ〳〵喰べてゐる有樣だとかいふものが、いかにも現在の「東京」の象徴の樣な氣がしたのです。イヤ、單に「東京」のみでなく「日本」そのもの、縮圖の樣にも思はれないではありませんでした。君にはさうは思はれませんか。

辛うじて鴨南蠻の一杯だけを平げ、殘り一杯をば丁度隣で燒スルメで飮んでゐた人にプレゼントして、それでもアルコールの力で幾らかいゝ氣持になり、その怪しい集團の中から出て來ました。そして程近い東京日々新聞社へゆきました。學藝部主任のH——君が歡んで迎へてくれました。僕が先着でまだ他には誰も來てゐませんでした。先づ會議室の廣間に通されました。餘りに廣過ぎますね、と言つて出て行つたH——君はやがて他の綺麗な室に案内しました。其處は社長室で、スチームでよく溫つて居ました。幸運にも同業の中で燒け殘つたこの新聞社はなか〳〵よき建築を持つてゐるのです。やがて山田耕作君、次いで北原白秋君が來ました。同じく選者である佐々木信綱博士からは僕は病氣で缺席するからとその選だけを屆けて來ました。發表當時は今一人松村武雄博士が加はるわけだつたけれど洋行中で、この四人で合選する事になつてゐたのです。

他の二君の意見も僕と同じでした。僕など初め一二等を無しにして三等だけにしようとまで言つたのだけれど、それでは社が困るといふことで結局二等二人三等三人ときまりました。可哀相に千圓とりそこなひましたね、と言つて同じく學藝部のA——君が笑ひました。一等は千圓の懸賞だつたのです。二等の五百圓だつて拾ひものだよ、と皆して笑ひました。

それでも何だ彼だ三時間近くかゝりました。會が果てゝ山田君は或る音樂會に出なくてはならぬとて歸り、北原君と僕とは社からの招待でツイ近くの中央亭に行つて夕飯をたべました。流石に此處には書間見た物凄い光景はありませんでしたが、それでもあたりの席に西洋人だの婦人づれの支那人だのといふのがずらりと綺麗に竝んだところを見ると、却つてまた我々の樣な田舍者は氣が引けてしまつてろくには物の味も解らぬといつた形もありました。學藝部の人たちの外に社を代表して社會部長のO——氏が一緒でしたが、この人は社內一の酒豪だといふ事で、恐らくこちらの二人の相手として選まれたものだらうと思はれました。食事が果てゝ談話室のストーブの前に移ると、O——氏は自分からバーの方へ立つて行つてウヰスキイの大壜を持出して來て口を切り、頻りに我等にすゝめました。折からクリスマスの前の事で、それにちなんで福引などもありあたりの賑やかななかに忽ちその一壜

はなくなりました。そのうち神田乃武男が死んだとか危篤だとかいふので O――氏は一二度電話口に呼び出されました。

河岸を變へよう、といふわけで其處を出、今度はもとの有樂町驛の下のあたりに出來てゐるバラックのカフエーステージといふのに移つてまたウヰスキイです。このカフエーの主婦といふのは死んだ板垣伯の姪だとかいふ人で新劇方面の人たちは大分この人に世話になつてゐるさうです。かなりの姥櫻だが、なか〳〵の美人です。肥後生れの O――氏、柳河生れの北原君、日向生れの僕、と三人とも九州人である事などが妙に話をはずませて從つてコップの數も無闇と加はります。

其處へ、やァ、と言つて入つて來たのは仲木貞一君でした。君はこの人を記憶して居ますか、早稻田の教室で一緒だつた人、そしてその頃から級中一の美男子で通つてゐたんです。さう言へば思ひ出すでせう。いま中外商業だかの記者をしてゐるとの事でした。

とかくするうちに醉も廻り、夜も更けました。いつどうしてそのカフエーステージを出たか、いつ何處で他の人たちと別れたか、とにかくそれから程經たころ飛びも飛んだり、大森海岸の料理屋茶屋といふのの三階に三人連になつて坐つてゐました。三人とは北原と僕とH――君とです。「藝者を呼べ」「何を仰有るんです、もう午前の二時ですよ」などの問答があつたと覺えてゐますが、とにかくそのうちに今の詩壇がどうだとか小說が何だとかいふ話が始まり、とう〳〵この三人が主になつて來年早々雜誌を出さう、出して斯界を一新する樣な鮮かな空氣を作つてやらう、雜誌の名は何とする、乃公もしつかりする、君もしつかりしろ、などと、果ては火も消えた樣な火鉢を中に三人手を摑み合つてベソを搔くといふ始末にまで及びました。氣がつけば隣の部屋に床を延いて捨てたまゝ女中などもう一人も部屋にゐなくなつてゐるのです。ただ德利の林立があるのみです。

とろ〳〵としたかとおもふと軒下を通つてゐる京濱電車の響に眼を覺されました。や、これはやかましい、もつと靜かな家に行つて飮み直さう、とツィその筋向うの松淺といふのに移りました。ここの料理なども君の記憶にあらうとおもふ。君とは落合はなかつたけれど、佐藤とはよく來ました。昨夜も昔戀しくて初め此處に來たのだけれども、近來料理專業に改めて、お馴染の古の家に行つたのでした。

程なく風呂が沸き、日あたりの座敷のお掃除が出來、鍋だ天ぷらだ海鼠の酢だとごたくを竝べて飮み始めました。いつか三味線の音じめが起り、朝日が西日になり、安房上總が海向うにぼんやりと暮れかゝる頃になつて、えんやらやつとおみこしが上りました。

大森驛でH――君は一人東京へ、僕等二人は一人は小田原まで一人は沼津までの切符を買つて西行の汽車にと乘りましたが、途中で北原の奴はまた謀反を起し、大船驛の近くの大船閣といふ溫泉宿に行つて今夜は泊らう、あそこには多少ィハクがあるとか何とか言ひ出し、とう〳〵其處で一人で降り

てしまひました。勝手にしろ、で獨り別れては來たものの淋しい夜汽車でありました。僕も實はお湯にでも入つて腰を伸ばしたいは山々だつたのだけれど、いかんせん「創作」の校正を途中でとめておいて出かけてゐたので流石にもうその上のズボラは出來なかつたのでありました。歸つて來ると待ちあぐんでゐる印刷所のオヤヂからウンと叱りとばされて、飲みすぎのあとのブル〳〵と慄ふ手先で赤インキのペンをとりました。そしてその筆つづきに斯うしたくだらぬ手紙を書きました。

では牧君、これでよします。君も元氣でせう。弱つたとは云ひながら僕もまだ以上を認めた程度の元氣を身體の何處かに殘してゐるのです。お互ひに一杯を擧げて殘りの健康を祝しませうか。（十二月廿四日）

巻末記

○本卷には明治四十四年から大正十二年までの隨筆小品七十五篇を收めた。單行本「旅とふる鄕」「海より山より」「比叡と熊野」「靜かなる旅をゆきつつ」「樹木とその葉」等に掲載されたものが多いが、雜誌に掲載されたのみでそれ等に洩れてゐたものも相當あり、また未發表と思はるる肉筆原稿のものもある。

○初期の作は初め「創作」に、次いで「潮音」誌上に發表されたものが多い。

○「故鄕より」から「曇り日の座談」までの四篇は明治四十五年（大正元年）嚴父病氣のため日向國坪谷に歸鄕中の作。「椿」から「或る歌の友に寄する手紙」までの二十三篇は大正四年から翌五年暮まで一家を擧げて相模北下浦の海邊に轉地中の作、但しこのうち數篇は東京本鄕の下宿で書かれたものである。「子供の入學」以後は大正九年八月沼津移住以降の作となる。

○「おもひでの記」は大正七年五月から同年九月まで「短歌雜誌」に掲載されたものであり、「野蒜の花」は大正十二年二月から同年九月まで「創作」に連載されたものである。なほ本卷所々に「本誌」「社友」等の言葉のあるのは多く「創作」「創作社友」を指すものであるからそのつもりで讀んでいただきたい。

○口繪寫眞の生家は一昨年夏の撮影、小學時代は高等小學校二年、中學時代は中學五年當時のものである。家族の寫眞は大正三年四月、東京大塚窪町時代のもの、左より喜志子夫人、長男旅人君、右端は當時上京中の令姪きぬさんである。(大悟法利雄記)

昭和四年十月十二日印刷
昭和四年十月十五日發行

牧水全集 第六巻

著者 若山牧水

發行者 東京市芝區愛宕下町四丁目六番地 山本三生

印刷者 東京市牛込區榎町七番地 竹内喜太郎

發兌 東京市芝區愛宕下町四丁目六番地 改造社

振替口座東京八四〇二
電話芝(43) 一一二一番 一一二二番 一一二三番 一一二四番

(富角製本)

日清印刷株式會社印刷